

平成17年度 学位論文

不登校経験者における「不登校」の認知に関する学校心理学的研究

兵庫教育大学大学院

学校教育研究科

学校教育専攻 学校心理コース

M04090K

堀田 夏子

= 目次 =

【問題と目的】	1
【方法】	5
(1) PAC 分析について	5
(2) 充実感尺度について	6
(3) 調査協力者の現在の状況に関するいくつかの質問	7
【結果】	7
(1) A さんの事例	9
1. 本人による解釈	11
① 各クラスターについて	11
② クラスター間の比較	13
③ 全体の感想	13
2. 調査者による総合的解釈	14
① 各クラスターについて	14
② 全体として	15
(2) B さんの事例	17
1. 本人による解釈	18
① 各クラスターについて	18
② クラスター間の比較	19
③ 全体の感想	19
2. 調査者による総合的解釈	19
① 各クラスターについて	19
③ 全体として	20
(3) C さんの事例	22
1. 本人による解釈	24

① 各クラスターについて	24
② クラスター間の比較	25
③ 全体の感想	26
2. 調査者による総合的解釈	26
① 各クラスターについて	27
② 全体として	28
(4) D さんの事例	29
1. 本人による解釈	31
① 各クラスターについて	31
② クラスター間の比較	33
2. 調査者による総合的解釈	34
① 各クラスターについて	34
② 全体として	36
(5) E さんの事例	38
1. 本人による解釈	41
① 各クラスターについて	41
② クラスター間の比較	43
③ 全体の感想	44
2. 調査者による総合的解釈	44
① 各クラスターについて	46
② 全体として	
(6) F さんの事例	48
1. 本人による解釈	51
① 各クラスターについて	51
② クラスター間の比較	54
③ 全体の感想	55
3. 調査者による総合的解釈	55
① 各クラスターについて	55
② 全体として	58

【全体的考察】	60
(1) 共通するキーワード	60
① 家族・家庭について	60
② 友達について	60
③ 教師について	62
④ 死について	63
⑤ 定時制高校・大検予備校について	63
⑥ 就労について	64
⑦ 専門機関について	65
(2) 男女差について	66
① 想起項目の出方について	66
② 不登校中の焦り・不安について	66
③ 不登校後の将来設計について	67
④ 不登校による損失について	68
(3) 不登校で得たことについて	68
(4) 現在の不登校児童生徒にむけて	70
(5) 本研究の学校心理学的意味	71
(6) 今後の課題	71
① サンプル数について	72
② 調査協力者の現在の状況について	72
③ 不登校の時期・期間について	73
④ 10年という設定期間について	73
【文献】	73
おわりに	75

【問題と目的】

平成 17 年 9 月に文部科学省によって発表された、平成 16 年度における我が国の小中高等学校に在籍する不登校児童生徒数は、19 万 817 人(速報値)であった。不登校児童生徒は平成 13 年度に過去最多を更新した後、若干の減少を示しているものの依然として深刻な人数となっており、教育行政上においても「不登校」の問題とその改善は喫緊の課題であると言えよう。この不登校の問題は、これまでに予防・介入・予後などの観点から様々な研究がなされてきた。本研究は中でも、かつて不登校を体験した児童生徒が現在どのように生活しているのかといった、不登校の予後・転帰に焦点をあてることを目的とする。

これまでに報告されてきた不登校の予後研究については、医療機関への入院や通所などを通して行われた「治療」の効果・転帰を短期・長期に判断した追跡調査研究(村田・三浦,2000)と、その結果から予後の予測因子を検証した研究(福間, 1980)の二つに大別されていると言える。村田・三浦(2000)の研究は中学校の不登校学級の卒業生を対象とし、元担任へのインタビューおよび卒業生へのアンケートを通して、①不登校学級の卒業生の卒業後の進路状況と現在の社会的適応状況の把握、②不登校学級への入級時や在席時の状況と卒業後から現在の状況との関連性、について検討することが目的であった。そして対象者を、不登校の様態などから、「神経症群」「学校起因群」「無気力群」など6つの群に分け、また現在の適応状態を「社会的適応群(学生・就職・自営業従事・主婦など)」「社会的所属群(アルバイトやパート・通信制高校に所属)」「停滞群(職場や学校に所属しない状態、あるいは引きこもりなど)」に分類し、不登校のタイプとその後の社会参加との関連性を検討している。

また福間(1980)の研究では、児童相談所で学校恐怖症・登校拒否症と診断された児童の保護者を対象として郵送法による質問紙調査を行なっている。この研究では登校拒否症を示した児童・生徒の約 10 年後における社会生活の状態について、①児童相談所通所後の登校状態、②義務教育終了後の就職や進学の状態、③現在の生活形態、④仕事や学業への適応状態、⑤心身の状態、⑥その他保護者として気がかりなこと、本人の困っていること、を保護者に尋ねている。回答内容は、①治療後の登校状況、②進学状況、③就職状況、④現在の社会適応状況に分けて、予後に関連する要因について検討している。

これらの研究で明らかにされた一般的傾向は、不登校後の追跡期間が長くなるほど、また不登校発現の年齢が早いほど、再登校・社会復帰を基準においた場合、転帰良好ケースの占める割合が多くなるということである。しかしそれぞれの研究によって不登校の予後の概念や状態像などの違い、治療・相談機関

の種類、治療形態、内容、転帰評価の基準、追跡期間、調査方法などの違いに問題点が指摘されており(門,1994)、これまでの調査結果を単純に合算して不登校の転帰について論じることができない状況である。特に、何をもって転帰や予後を良好とするのかという判断基準に関しては、復学など再び学校に参加していることを良好とするもの(福間,1980)、就職など社会参加していることを良好とするもの(村田,2000)、保護者の認知を基準とするもの(渡辺,1998)など、様々である。しかも予後の判断基準を学校参加状況におくことには多くの研究者がすでに疑問を呈している(門,1994; 渡辺,1983等)。またこれまでの研究においては、「今現在」どこに所属しているか、学校卒業から「現在まで」どのように過ごしているかについての調査が主であり、不登校を知るにあたって、「その当時」の認知・感情・行動を調査したものは多くない。

その当時の認知・感情・行動を対象としたものには渡辺(1998)による研究がある。この研究では、母親の養育態度と不登校の予後との関係について、不登校児童生徒の「親の会」に参加していた母親を対象として質問紙調査および面接調査を行い、母親自身の振り返りによる検討を行った。振り返りの内容としては、①現在の子どもの状況、②不登校発現当時の状況、③不登校発現理由(当時思ったこと、今思っていること)、④教師との関係、⑤養育態度、⑥学校への注文、⑦現在子どもが不登校になっている親へのアドバイス、であった。しかしながら、この研究ではあくまで被調査者は母親であり、不登校をしていた本人ではない。この研究に限らず従来の研究において、不登校をしていた本人にアプローチしているものはごく少数である。不登校児童生徒の予後について考える時、当時の経験や現在の状況について、それを他者である研究者や教師・家族が評価する場合と、自らが評価する場合ではおのずと捉え方は異なってくるものであろう。本当の意味で不登校を考えると、予後というのは本人たちにしか分からないことなのではないかと考えられる。さらに言えば、不登校体験そのものが彼らにとってどのような意味があったのか、それが彼らの現在にどのような影響を及ぼしているのかということは、彼ら自身でなければ分からないことなのではないだろうか。

これに関して、不登校経験者自身を対象とした研究には森田(2003)の報告がある。森田(2003)はかつての不登校児童が中学校を卒業してからの状況だけでなく、当時の状況についての回答も合わせた初の大規模なフォローアップ調査を行っている。調査内容は、①不登校の始まりと期間、②不登校中の気持ち、③学校外機関の利用、④不登校の得失、⑤学校とは、⑥現在の状況、についてであり、その結果は「学校の荒れ」「教師」「家庭」など17のカテゴリーに分類して検討されている。この研究は、全部で75例とかなり大規模な人数

にインタビューを行っているところが特徴であり、過去に不登校であった生徒の経験や意見を直接聞くことによって、不登校の予後に関して非常に有益な情報を提供していると言えよう。しかしながら、この研究は社会学的視点から、地域社会・家庭・学校の連携など社会システムの重要性を言及するものであったと言え、個人の認知構造を深く考察するものではない。また、これだけの人数に実施するにあたっては複数のインタビュアーが必要となり、上記のような共通項目を前提としてそれぞれに振り返りを行ってもらっている。しかし、個人の「不登校経験」を振り返るにあたって、「期間」や「損失」なども重要ではあるが、その記憶の構造や認知の仕方はもっと個人的なものであると考える。また質問内容を限定してしまうとその内容にも限界があるように思われる。そこで本研究は、大人数を対象として不登校の予後に関する普遍的・平均的データを取ることを目的とするのではなく、少数事例において森田(2003)と同様に、過去に不登校であった本人が当時の認知・行動・感情、また不登校経験をどのように受け止めているのか、過去の不登校経験が今の自分にどう影響しているのかについて焦点をあてる。

ところで、過去に不登校であった児童生徒にその経験を振り返ってもらい、彼ら自身がどのように受け止めているかという極めて個人的な感情にアプローチしようとした場合、ある程度の長い期間を経ているとしても当然のことながら細心の注意が必要となってくるであろう。「不登校」という過去を振り返る行為は、現在の世界に生きている本人達にとって、必ずしも望ましいものであるとは限らないからである。しかしながら、調査者側の用意した項目に対して表面的な回答を求めるといった通常の質問紙法による調査ではやはり、平均的なデータの域を出ることができない。そこで本研究では、あくまでも本人を主体として過去と現在にアプローチすることを可能にする方法として、PAC分析(内藤, 1993)を用いることにする。PAC分析とは、Personal Attitude Construct (個人別態度構造)の略称であり、元々は個人別に態度構造を測定することを目的として開発されたものであるが、現在では、個人の認知やイメージの構造、心理的場、アンビバレンツ、コンプレックスといったより深遠な心的問題までも測定可能であることが確認されている研究手法である。具体的には、①当該テーマについての自由連想、②連想項目に対する被調査者自身による類似度評定、③類似度評定値を用いたクラスター分析、④クラスター分析で示された項目群に対する被調査者自身の内省、⑤研究者による解釈、という手続きをとる。自由連想で表出されたイメージ項目にクラスター分析を加えることによって、その人特有の内的世界を、その人自身が感じている構造で視覚的に示すことを可能にするものである。またそこに研究者が解釈を加えることで、「一人の個人

を深く理解すること」と「個人を超えた一般法則を導き出すこと」という、一見相反する方向の両方を同時に成立させることを可能にするような研究手法である(松崎,2002)。このようなPAC分析の手法であれば、連想刺激から思い浮かぶ被調査者のイメージのみを扱うため、思い出したくないことや無意識に抑圧してしまっているような感情を無理やり引き出してしまうような危険性も少なく、「過去への振り返り」によって無責任に過去を暴いてしまうという危険を回避できるのではないかと考えた。なおかつ、質問紙法では得ることのできない、個人特有の認知やイメージにアプローチができるであろう。このような理由から、本研究では連想刺激として「不登校」を用いてPAC分析を行ない、「不登校経験」が個人においてどのように構造化されているのかを検討する。

さらに本研究では、不登校経験者において、「不登校」という過去の経験と現在の状況がどのように関連しているのかについても明らかにするために、従来の研究で予後の判断基準となっている社会参加の程度や友人の有無といったことに加えて、被調査者が現在の生活をどのように受け止め、充実感をもっているかということを大野(1984)の充実感尺度を用いて測定する。充実感尺度は「青年が健康的な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情」として定義されており(西平,1973)、充実気分・自立・連帯・信頼の4側面を測定する尺度である。本研究では、この充実感尺度において青年期の平均的得点を示していることや仲の良い友人との交流があることをもって「現在の生活において適応している」と仮定することとする。

以上のように本研究では、過去に不登校を経験した本人自身がその当時の事をどのように受け止めているのか、また、その経験を自身が現在の生活の中でどのように受けとめ生かしているのか、もしくは重荷になっているのかについて検討することを目的とする。また本研究ではPAC分析を用いることで、調査協力者に関しても単なるインタビューにとどまらず、自身の経験が自分の中でどのように構成されているのか、目で見えて語る「場」を提供することになる。そのような体験によって、「不登校」という経験に対して新たな見解や今の自分への発見、気持ちの整理など、何らかのきっかけとなれば、と考える。加えて、現在、不登校であり、そのことが今後の自分自身や進路にどのような影響を及ぼすのかについて不安を抱いている子どもや親は非常に多い。彼らに対して何らかの有益な情報を提供することも本研究の目的である。

【方法】

調査協力者は小学校から高校までの期間に不登校を経験した 20 歳代の男女 6 名(男性 4 名, 女性 2 名)であった。調査協力者にはフリースクールや大検予備校などに配布・掲示した協力要請の文書を通して, 自主的に参加してもらった。それぞれの調査協力者における調査の流れは以下の通りであった。

1. (調査の事前説明) 調査の内容に関する概要の説明と協力同意の確認
2. (調査実施当日)
 - 2-1. 調査の内容に関して, 「不登校」の体験について語っていただくこと, 実施中のやり取りについて録音すること, いつでも中断できることを再度説明し, 同意書への記入を求める。
 - 2-2. P A C 分析
 - 2-3. 充実感尺度への回答
 - 2-4. 調査協力者の現在の状況に関するいくつかの質問

なお, 調査はプライバシーの確保が可能な施設(例えばH教育大学サテライト校演習室・K 大学研究室・大検予備校面接室など)において, 個別に実施された。全ての調査協力者において, 調査は問題なく実施された。B さんのみが録音を拒否された。

(1) P A C 分析について

本研究では「不登校経験」が個人においてどのように構造化されているかを明らかにするために P A C 分析(内藤, 2002)を実施した。P A C 分析の手続きは以下の通りである。

1. 白紙のカード(15cm 四方)を 30 枚程度調査協力者の前に置く。
2. 調査協力者に, 連想刺激である「学校に行かなかった体験」について思い浮かぶ順に思い浮かばなくなるまで自由連想をしてもらい, カード 1 枚につき 1 つの連想を記入してもらい。自由連想のための教示は, 「あなたが学校に行かなかった時の体験についてどのような思いや考えが浮かんできますか。またどのように受け止めていますか。気持ちや場面, 出来事など何でも自由に思い浮かべてください。思い浮かんだ順にこのカードに記入してください。」であった。なお, ここで連想刺激を「不登校」ではなく「学校へ行かなかったこと」としたのは, 被調査者それぞれの中で, 当時の状況を「不登校」と認知しているとは限らないからである。
3. 自由連想とその記入の終了後, 調査協力者にとって重要だと思われる順にカードを並び替える。

4. 調査協力者が記入したカードをランダムに2枚ずつペアにして呈示し、各項目間の類似度評定を行う。教示は「これら2つカードに書かれている内容やイメージは、あなたにとってどの程度似ていますか。言葉の意味ではなく直感的なイメージの上で判断して、似ている程度を5段階で答えてください。」であった。
5. 4で作成された各項目間の類似度距離行列から青木（2005）によるフリーウェアソフトのBlack Boxを用いてクラスター分析（ワード法）を行なう。
6. クラスター分析の結果を見ながら項目の内容と相互の関連性について振り返る。
7. 項目ごとに、その項目の意味あいが感情的にプラスかマイナスか0かを記入する。

これらの手続きのうち、2から4の「自由連想」「カードの並び替え」「類似度評定」と7の「感情的な意味あいの評価」は主に調査協力者自身による作業である。また、6の「クラスター分析結果を見ながらの振り返り」は調査者による半構造化面接である。ここでは、クラスター分析の結果出てきたデンドログラムとクラスターごとにまとめた調査協力者が記入したカードを本人の前に並べたうえで、「このまとまりを見て、なぜこれらの項目がひとつのグループになったのか思い当たること、共通点などありますか」と質問した。また共通することだけでなくこのまとまりを見て直感で思い浮かぶことでもかまわないとして本人の中で何も思い浮かばなくなるまで続けた。

（2）充実感尺度（大野,1984）

充実感尺度とは「青年が健康的な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情」として定義された充実感を測定するものであり、「充実感気分—退屈・空虚感因子（「毎日の生活にはりがある」「生きがいのある生活をしている」など5項目）」、「自立・自信—甘え・自身のなさ因子（「私は精神的に自立していると思う」「自分の信念に基づいて生きている」など5項目）」、「連帯—孤立因子（「自分が情けなく嫌になる(逆転項目)」「私を分かってくれる人がいないと思う(逆転項目)」など5項目）」、「信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散因子（「生まれてきて良かったと思う」「私は価値のある生活をしていると思う」など5項目）」という4側面の20項目で構成されている。各項目に対しては、今の自分に「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」の5段階で評定し、高得点であるほど充実感が高いと言える尺度である。

(3) 調査協力者の現在の状況に関するいくつかの質問

インタビューの最後にアンケートとして現在の状況に関する質問を行った。質問項目は以下の通りである。アンケートへの回答に要した時間は約10分であった。

1. 年齢
2. 学校に行かなかった時期と期間
3. 学校に行かなくなったきっかけについて、「学校内の人間関係」「学校外の人間関係」「先生との関係」「勉強の問題」「体調の問題」「きっかけはない」「分からない」「その他」の中から当てはまると思うもの全てを選択する。
4. 不登校をしていた時期の専門機関の利用について、「公的な心理相談施設(教育相談センターなど)」「民間の心理相談施設(大学心理相談など)」「病院(心療内科)」「フリースクール」「その他」の中から利用したもの全てを選択する。
5. 中学校卒業からの現在までの社会参加状況について記述する。
6. 学校に行かなかった経験について今現在どのように思うかを、「肯定的」「どちらでもない」「否定的」の中から1つ選択する。
7. 現在仲の良い友人がいるかどうかについて、「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」の5段階で評定する。

【結果】

各協力者の「不登校のきっかけ」「不登校期間」「専門機関の利用」「不登校後の状況」「不登校体験に対する現在の評価」「現在の友人の有無」「充実感得点」についての回答内容は表1にまとめた通りである(なお、この表では「不登校」という言葉を用いているが、調査の際には「学校に行かなかった時期」としてしている)。それぞれの質問項目における回答内容より、今回の調査協力者は「現在の生活において適応している」と現段階で判断した。

表1 調査協力者6名の基本データと充実感尺度の得点

調査協力者		Aくん	Bさん	Cくん
性別・年齢		男性・25歳	女性・24歳	男性・24歳
不登校のきっかけ		学校内での人間関係勉強の問題	学校内での人間関係先生との関係	学校内での人間関係勉強の問題
不登校期間		高校1年から中退するまで2年間	小学校6年から高校2年まで	高校1年
専門機関の利用		高校付属のカウンセリングルーム	心療内科	なし
不登校後の状況		大検を受験して大学進学、去年大学卒業	17歳から予備校に通い、現在は看護学生	定時制高校卒業後、大学進学。この春から派遣社員
不登校体験に対して、今現在…		どちらでもない	肯定的	どちらでもない
現在仲の良い友人がいる		かなり当てはまる	非常に当てはまる	どちらとも言えない
充実感尺度	充実感 (2.26~4.14)	2.4	3.2	3.0
	自立・自信 (2.46~3.94)	2.6	2.8	1.8
	連帯 (2.46~4.14)	2.8	3.4	4.0
	信頼 (2.81~4.19)	3.4	3.2	3.6

調査協力者		Dくん	Eさん	Fくん
性別・年齢		男性・21歳	女性・24歳	男性・25歳
不登校のきっかけ		学校内での人間関係 学校外での人間関係 分からない	学校内での人間関係 分からない	学校内での人間関係 勉強の問題 体調の問題
不登校期間		中学1年から3年	中学2年	高校2年
専門機関の利用		公的機関	病院	病院
不登校後の状況		大学4年生、現在就職活動中	大学進学、現在は休学して派遣社員	大検後大学院まで現在社会人
不登校体験に対して、今現在…		肯定的	どちらでもない	肯定的
現在仲の良い友人がいる		非常に当てはまる	非常に当てはまる	かなり当てはまる
充実感尺度	充実感 (2.26~4.14)	4.0	3.0	3.4
	自立・自信 (2.46~3.94)	4.8	3.8	3.4
	連帯 (2.46~4.14)	4.4	3.2	3.6
	信頼 (2.81~4.19)	4.0	3.2	3.8

※充実感尺度の各下位尺度に付した数値は、大学生285名(平均19.9歳)によるM±SDの範囲(大野ら, 2004)

(1) Aくんの事例

Aくんは去年大学を卒業した25歳の男性である。インタビュー当時は未就業であった。所要時間は自由連想時間1時間強、インタビューが1時間強であり、合計して3時間近くだった。

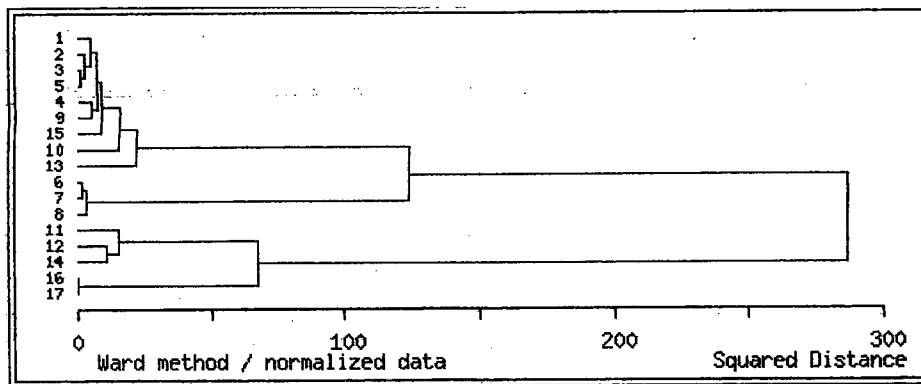
想起した項目は17項目で4つのクラスターが抽出された。またAくん自身が評定した各項目に対する感情的イメージは、プラスの項目が5個、マイナスが8個、どちらでもないが4個であった。図1がAくんの分析結果である。

重要順位の高い順に3分の1にあたる6項目は以下の通りであった。

- 1：(－)1ヶ月くらいで最初に仲良くなった一人と徐々に合わなくなった
- 2：(－)2学期に入ると、私の環境が徐々に悪くなってきたように思う
- 3：(－)私と合わなかったA君が私がいたグループと親しくなり始めた
- 4：(－)ガッコウ自体に居心地の悪さを感じるようになった
- 5：(－)2学期中にはY君グループがクラスの中心になっていたのも、ガッコウは苦痛だった
- 6：(－)ガッコウに通っている間一番ショックだったことが、ガッコウに置きっぱなしにして教科書がメチャクチャにされたこと

これらの項目ではAくんが不登校になるまでの状況や流れが挙げられている。高校に入って最初のうちは問題なく過ごしていたにもかかわらず2学期に入り友達のY君をめぐる学校での居心地が徐々に悪くなっていく様子や、決定的にショックだった事件が重要項目に挙げられている。ほとんどの項目にマイナスがついているが、6番目の項目にプラスがついているのは、出来事としてはショックな事件ではあったが、これをきっかけに張り詰めていたものがいったん切れ、結果として現在の自分につながるものになったという意味でプラスのイメージがついているのではないかと考える。

17項目全体のイメージとしてはプラスが5個、マイナスが8個、どちらでもないが4個であった。マイナスが8個と多めではあるが、プラスとどちらでもないで9個なのでAくんの不登校当時の認知のイメージとしてはマイナスイメージとそうでないイメージが半々であると考えられる。



<クラスター1>

- 1: (-) 1ヶ月くらいで最初に仲良くなった一人と徐々に合わなくなった
- 2: (-) 2学期に入ると、私の環境が徐々に悪くなってきたように思う
- 3: (-) 私と合わなかったY君が私のいたグループと親しくなり始めた
- 5: (-) 2学期中にはY君グループがクラスを中心になっていたので、ガッコウは苦痛だった
- 4: (-) ガッコウ自体に居心地の悪さを感じるようになった
- 9: (+) Y君から直接的に悪口を言われるようになってきた。あの頃は我慢して過ごしていた。今思えばよくキレなかったと思う
- 15: (-) その時の私は学校からいかに早く帰られることだけを考えていたように思う (-)
- 10: (+) 2学期中にそれでもなんとかガッコウには通えた。救いだったのは中が悪かったのはA君をいれて2.3名だったので、クラス中から嫌われてはいなかったこと
- 13: (-) 私は入学当初に仲良くなったグループを離れ別グループと一緒にいるようになった

<クラスター2>

- 6: (+) ガッコウに通っている間一番ショックだったことが、ガッコウに置きっぱなしにして教科書がメチャクチャにされたこと
- 7: (+) その教材を母親に見せた。誰にも言うなと口止めしたが、三者面談の時こっそり担任の教師に見せていた。夜教師から電話から電話がありそのことを知った
- 8: (+) 張りつめていた気持ちが切れ、3学期からガッコウに行けなくなった。今冷静に考えると冬休みの宿題をやっていなかったのも原因のひとつかとは思う

<クラスター3>

- 11: (-) すべり止めの学校だったので最初からあまり気がのらなかった
- 12: (0) 最初は思っていたよりも早くガッコウになじめた
- 14: (0) 1学期中は特に居心地の悪さを感じることはなかった

<クラスター4>

- 16: (0) 私は元々ガッコウがあまり好きでなかった。小中は特に問題はなかったが、すぐ休みたがってし、ずる休みもよくしていた
- 17: (0) その嫌ガッコウ感情がすべり止めの高校に行くしかない状況で膨れ上がり、現実と折り合いがつかずにイヤイヤ通っているうちにガッコウに溶け込むチャンスを自分でなくしてしまったのかなと思う

図1 Aくんの自由連想項目とそのクラスター分析結果

*各項目に付した番号は本人による重要度順位である。

*各項目で付した (+) (-) (0) は本人によるその項目の感情的意味合いである。

1. 本人によるクラスターの解釈

①各クラスターの解釈

クラスター1

このクラスターを概観して本人に思い浮かぶこと、共通項目を述べてもらおうと「やっぱりY君と仲良くなったのが…いや、仲が悪くなったのが原因かな」「強いて楽しくもなかったし学校自体にあまりいいイメージがなかった」のように説明があり、不登校の原因が学校の間人間関係であることを裏付けるように語られている。また、「いつの時代でも思ってるとは思いますが、はじめての電車通学でめんどくせえと思ってた。」「(高校の立地)環境としても良くなかった」と、生来の面倒くさがりやという性質と学校が遠かったという流れについても説明してくれた。また、上記に挙げられ項目以外に「闇でサッカー部員だった」「サッカーが好きで最初ははまってたんだけど結局行ってなかった」と加えた。

クラスター2

ショックだった出来事に関して「それまではごまかしごまかし学校行ってたけど(その事件があって)母親が担任に知らせて、ああ、担任に知られたんかあって自分の弱みを見られた気がして、もうええわって感じになった」「母親に対してすごく怒った記憶がある」「かろうじて学校とつながっていた意識がこれでもう学校はないなって完全に断ち切れた」と語り、「これ以降3学期は行ってないから大きいかな」「この出来事がなかったら通りあえず(学校には)行ってたかも」と説明してくれた。また、「すべり止めの併願で入ったのにテストを受けるたびに俺ばかになってるやん、て思った」「確かに引き金は事件だけど勉強に関してはいまいちだった」と、勉強面に関して加えた。また教師に対しては「先生は結構助けてくれたりとか良くしてくれた。それに応えられなかったことが心残りやけど、悪いイメージは全くない」とのことだった。全体として「一番辛くていいことのない時期だった」とまとめ、「今思えば(3学期に)学校に行けって言われたけど、もう行かへん！って言ったのは冬休みの宿題ってのもあったんちゃうかな」と加え、上記の項目以外では「こんなことぐらいで学校行かなくなった自分は弱いやっちゃんあって気がした」「行かんようになってほっとしたようながっかりしたような」と当時の心境を述べた。さらに「学校に行っていないっていうのは母親には言ってたけど父親には2年になって休学するまで言わなかった」「わざわざ早く起きてサッカー部の朝練って言って父親が見いひんような部屋行って、行くまで待ってた」と話してくれた。また、「いわゆる不登校にまさか自分になるとは思わなかった」「今は普通だと思う

けど10年前には珍しく、学校にカウンセリングの先生がいて話を聞いてもらった」と加え、最後に「後になって思ったけどここで休んでばれて良かったと思う」「この頃はすさんでたから護身用に何か持ってなあかんわって思ってた」「ちょうどこの頃同じ高校で刺殺事件があって、もし、このまま学校行ったら俺がこうなってたかもって思った」「もっと追い詰められてこうなる前に行かへんくなってよかった」と当時の不安定さを語ってくれた。

クラスター 3

項目 12 について、高校生活の初めはサッカーなどの「共通の話題を持った人が中学よりも多かったので」楽しかったとのことだった。また 1 学期のうちは Y 君ともまだ話をしていたが、どっちもが嫌になってきている前兆が見えていたとすることで「順調さと崩壊の始まりみたいなのが両方あったみたいな感じかな。」と語った。そしてそのことに関して「あそこでもうちょっとうまく意思疎通が出来たらうまくいったのかなってのはある」と振り返った。項目 11 に関しては、「(ランクを下げた公立高校である)A 高校なんて落ちると思わなかったわ。自分でもばかき加減にがっかりしたわ。」「すべり止めで高校はもうどうでもいいやあみたいな感じで…ってのが悪かったかなあ。」と語った。他に補足として地元と離れた高校に通うことになって地元の友達と離れ離れになって寂しい気持ちもあったと話してくれた。

クラスター 4

このクラスターは A くんにとってのまとめのクラスターということであった。「小学校時代も中学校時代も学校に行きたがる子どもではなくて結構ずる休みをしていた。」「中学のときはお年玉をもらった残りをこれあげるから休ませてくれ！母親を買収して休んでいた」というエピソードもあった。教師に対しても「特に先生とか、仲が良いわけでもなく悪いわけでもなく。すごい微妙。思い出に残る先生も特にいるわけでもなく。」と語った。項目 17 の現実と折り合いがつかないということに関する質問には「二次募集の公立にも落ちて、それが 3 月の終わりまでまあいいかって思うこともなく、ひきずったまますべり止めに行った」と答えてくれた。また、出てきた項目以外では「今やったら高校なんていかなでも、大検でもとっちゃえば全然いいんじゃないってのはすごい思うんやけどその当時はそこまで(大検は)メジャーでもなかった」「10 年前は行くべきっていうルートっていうか、俺らがそういうの最後の世代。この小中高大学っていうライン、通るべきものみたいな。行かないっていうのは考えられない」「情報があつたら、高校なんて行かんと大検とかやったほうが全然いい。

そうすれば受験勉強だけやったらいいわけやし、極論言ったらその当時、高1年の時点で（大検の）資格取ったら後はまるまる遊んで費やせるし計画通りとか思惑通りに行けば2年間も無駄な勉強せんでいい、テストがあるわけでもないし教師がいるわけでもないし、ほんとに自由に自分のために、制約もないし。ああなんでそうせんかったんやろ俺！って。今の子はほんまええわ」と述べていた。

また、他者との付き合い方について「学校が嫌いなのは集団も嫌い。ある程度までは仲良くなれるんやけど、そっからかなり仲良くなるっていうのが苦手とかしんどいっていうか。うん。学校とかで仲良くするっていうのは得意とかできるけど、別れてじゃ、どこどこ遊びに行こうかっていうのが俺はあかんねんっていうかすごい苦手。だから人付き合いがうまいのか下手なのか良く分らない。学校ってみんなで仲良くしなさいとかそういうのがどうしてもできない。だから学校を含めた。学校の中での関係すべてがあんまり好きじゃなかった。」と言及した。そして大検予備校に対して「大検の学校行ったときすごい居心地が良かった。しがらみ少ないし。少人数やし。やっぱり、少人数はさすがにすごいもんで、やっぱり仲良くなりやすいし普通に居やすいっていうのがあった」と話してくれた。

② クラスター間の比較

クラスター間を比較する中でつながりが強いと述べたのはクラスター1（不安定な学校生活）とクラスター2（不登校のきっかけになった事件）であり、これらは両方ともが学校生活に関連しており、Aくん曰く「一番しんどい時期だった」ということである。次に関連を認めたのがクラスター1とクラスター3である。クラスター3は高校生活のはじめを表すものであり、この高校生活の初めさえ上手くいっていたら不安定な学校生活を過ごさなくても良かったかもしれないと振り返った。同様にクラスターの3の高校生活の始まりがクラスター2の事件で終わるという流れで説明し、「高校生活の始まりと終わり」としてまとめている。最後にクラスター3とクラスター4はどちらも学校という意味でつながっており、もともと学校が嫌いだったのに無理して行って、たまたま出だしが良かっただけだったと分析してくれた。

③ 全体の感想

今回出てきた結果について、何か思うことはありますかという質問に対して、「カテゴリーが全部出て、あの時うまいこと言ってたらあのまま学校に行ってたのかなあってこととか、結構つながってるもんやなあとか思った。」と答えて

くれた。Aくんが学校を行かなかった時のことが表せているかという質問には「まあ大まかやけど確かに！ってことがね。出てる。」ということだった。

2. 調査者による総合的解釈

まず各クラスターの内容について吟味した後で、それらの関係や全体的特徴について考察する。

①各クラスターについて

クラスター1

このクラスターは高校1年当初のAくんの学校内の人間関係状況に関するものだった。Y君というクラスメイトとの出会いと決裂が、Aくんが自分の不登校体験を思い出すにあたって、多く想起されるものだということが分かる。しかしこのクラスターは、不登校の直接のきっかけとなる項目の集まりというよりは、不登校直前の<不安定な学校生活>を表すクラスターであると考えられる。9項目中7項目にマイナスのイメージがついていることからその不安定さを読み取ることができる。さらにプラスがついている2項目に関しても、そんな目にあってキレなかった自分へのプラスイメージ、状況は最悪だったが本当に敵意を表していたのは数人で、他の人から無視されるようなことはなかったという唯一の救いというプラスのイメージでありどちらかというとな消極的なプラスイメージであるように思う。しかし逆に言えば、直接悪口を言われるような辛い状況にあっても、普通に話をしてくれる友達もいるということで、持ちこたえることができるということでもあるし、Aくん自体の人柄によるものかもしれないが、そのクラスの状況が誰か一人をターゲットにいじめを行うというクラスではなかったことでもある。

クラスター2

これはクラスター1の「不安定な学校生活」をなんとか続けていたが教科書をメチャクチャにされたこと、それが親と担任にばれた事で張り詰めていたものが切れたという、<不登校のきっかけになった事件>に共通するクラスターである。それまでひとりで頑張っていたものが母親や担任に知られたことで、弱みを見られたとあってしまうが、同時に隠す必要がなくなったということである意味で楽になったのだと思われる。そしてこの事件があったからこそ、学校に行かないという選択肢を選び、そのことが現在の自分につながっている、そういう意味も含めて、項目そのものの言葉のイメージ自体はマイナスのように思えても、実際にはプラスばかりついているのではないかと考える。そしてその後付け加えられた刺殺事件の話にもあるように、学校を休むことで自分も

なにかしてしまふかもしれないという、うちに押さえつけていた感情が爆発することなく消化できたのではないかと思う。

クラスター 3

このクラスターではマイナス項目が 1 個、どちらでもないが 2 個で、出てきた項目そのものは思ったよりは学校になじめた、とか居心地は悪くなかったというような項目であったが、話を聞いていると、その高校に入学するまでの受験の段階で色々あったということで、本命の高校を落ちて、なんの心の準備もないまま入った割には平穏で居心地が悪くなかったとうことだった。逆に言うと、本人も元々が面倒くさがりの性格で、学校そのものが好きでなかったと分析するように、最初から本人自身も、高校生活に多く希望を抱いていなかったということではないかと思う。当時は中学校を出たら、高校・大学・就職のレールをこなしていくものだという常識に疑問を抱かず、だからといって、入学した高校に満足感もなく、あくまで「思ったより」順調だったという説明が印象的であった。このクラスターは本人の言葉を借りて解釈すると＜嵐の前の静けさ＞を表すクラスターではないか考える。

クラスター 4

これは本人が述べる通り＜現在から見たまとめ＞のクラスターである。他のクラスターが当時の気分、出来事などを表しているのに対し、このクラスターでは高校に入る前までさかのぼってやっぱり自分は学校というものが好きでなかったということ、人付き合いに関しても学校内での関係ならうまく友人関係を作れるが、それ以外になると引いてしまうという、客観的な友人関係に関する評価、また、不登校になった原因についても、Y君の問題もあるにしても、「すべり止めの学校に行くしかない状況を作ってしまった自分」「学校が嫌だという気持ちが自分から学校を遠ざけて、なじむチャンスを逃した」というように、自分に帰属させている。これは 10 年という月日が経ったからこそ出てくる項目であるように思う。また「その当時に今のように不登校に関する情報があったらよかったのに」「今の子はいいなあ」という発言や、2 項目ともにイメージが 0 であることから、これらの項目が現在からの視点であることを裏付けていると言えよう。

②全体として

インタビューをしている時の A さんの印象は、声が大きくてはきはきと歯切れよく話してくれる人というものであった。沈黙もあまりなく、こちらが質問

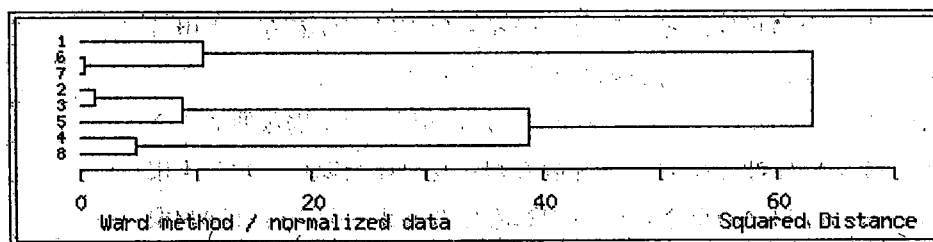
したことに関しては丁寧に答えてくれ、初めのほうでこそ緊張していたようだったが「他にありますか」と聞くと次から次へと言葉が出るようだった。インタビューは施設が閉まる時間に合わせて終了したが、出てくる言葉は尽きなかった。

Aくんの不登校経験のクラスターは<不安定な学校生活><不登校のきっかけになった事件><嵐の前の静けさ><現在から見たまとめ>の4つで構成されていた。すなわち4つのクラスター中3つが学校に関する事で、1つは現在からの振り返りにあたる。その当時のことを思い出すとやはりY君をはじめに、アンケートの答えにもあるように、「人間関係」に纏わるエピソードが順に出てきていた。注目すべき点としては、Aくんに関してはきっかけにしかすぎないと本人が後から解釈してはいるが、彼の不登校経験には「Y君」という原因が、はっきりしている。この特徴は他の調査協力者には出てこないものであった。もちろん、他の5人にも原因になる人物や出来事はあったかもしれないが、想起項目には出てくることはなかったので、Aくん特有のものだと考える。だからこそ、彼の発言の中には「あの時うまくやっていたら今は違っていたかもしれない」という類のものが多く含まれていたのではないだろうか。また。本人も述べていたように「まさか自分がいわゆる不登校になるとは思わなかった」という発言どおり、初対面にもかかわらず彼はとても社交的で、他の5人の協力者よりも活動的な雰囲気が強かった。Y君のことがなければ、もともと怠け者だという性質を差し引いても、普通に高校卒業して大学に行っていたかもしれないという気持ちから、不登校経験を振り返ってときに、「どちらでもない」という答えになったのではないかと解釈する。また、家族との関係についてお父さんには不登校の事実を長い間打ち明けなかったが、お母さんは早い段階から知っていた。本人からすれば「弱みを知られた」という気持ちもあったようだが、彼にとって母親の存在はやはり大きかったのではないかと思う。また彼の場合、学校の先生やカウンセリングルームの先生が相談に乗ってくれていたようで、そのことも彼にとっては良いイメージで残されている。家族・教師の例からも彼の孤立感というのは少なかったのではないかと推察される。

またAくんにおいては、不登校になった原因や自分自身の欠点について分析していることも特徴であると思う。「遠距離を通学するのがしんどかった。もともと学校が好きでなかった。学校という枠を超えての友達づきあいが苦手だった。自分から学校になじむチャンスを逃していた」といったように、そういった自分の性質に対して理由付けを行っていることが特徴であった。

(2) Bさんの事例

Bさんは、現在24歳の看護学校生である。小6から高2まで不登校であり、大検予備校を経て現在に至っている。インタビューの所要時間は、自由連想時間が約5分、インタビュー15分程度、合計しても30分に満たなかった。連想項目は全部で8項目、プラスのイメージのものが2項目、マイナスが5項目、どちらでもないが1項目であり、3つのクラスターに分かれた。図2がBさんの分析結果である。



<クラスター1>

- 1: (-) 学校にはやっぱり行きたくなかった
- 6: (-) 学校の友達からの電話が嫌だった
- 7: (-) 学校の先生からの連絡が嫌だった

<クラスター2>

- 2: (-) 友達が欲しかった
- 3: (-) 話し相手が欲しかった
- 5: (-) 何人かと文通していた

<クラスター3>

- 4: (0) 家にずっといた
- 8: (0) 外出は買い物だけだった

図2 Bさんの自由連想項目とそのクラスター分析結果

*各項目に付した番号は本人による重要度順位である。

*各項目で付した(+) (-) (0) は本人によるその項目の感情的意味合いである。

重要順位の高い順に3分の1にあたるのは次の3項目である。

1：(－) 学校にはやっぱり行きたくなかった

2：(－) 友達が欲しかった

3：(－) 話し相手が欲しかった

これらの項目は、振り返ったその当時の感情を表している。また、いずれの項目もマイナスイメージがついている。ここからは、「学校には行きたくないけど、友達や話し相手が欲しい」というBさんの寂しさや葛藤を窺うことができる。また、全項目の単独イメージを見ると、プラスが2個、マイナスが5個、どちらでもないが1個と、全体的にマイナスのイメージが多い。つまり、Bさんの不登校当時に対する認知はマイナスで構成されている。しかし本人による不登校経験の評価は「肯定的」であった。これらのことを含めて解釈を進めていく。

1. 本人によるクラスターの解釈

①各クラスターの分析

クラスター1

「小学校6年生の時、実際学校に行ったのは3ヶ月ほどで、そのうちまともに通ったのは1ヶ月程度。最初のうちは通っていたけど苦痛で仕方がなかった。」

「学校と疎遠になりたくて仕方がなかったが、先生や友達に学校に行かないことについて言われることが嫌だった。」とにかく学校というものが嫌だったのでこのまともまりは学校・人間関係といったキーワードで成り立っていると思う。

「6と7は相手が友達か先生かで違うだけで、内容はとても近い。」ということであった。

クラスター2

「学校に行かない間、ずっと家にいた。学校の友達は欲しくなかったけど、そうじゃない友達は欲しかった。」と語り、「本来なら学校に行かなくちゃいけないのに行けてない、母親が主な話し相手ではあったけど、やっぱり寂しかったのかなあ。」と解釈してくれた。「誰かとコミュニケーションが取りたくて文通を始めた。結構まめで4人と3年ほど続いた。2と3が話し相手と友達が欲しかったという意味でとても近いと思う。」誰かとコミュニケーションを通りたいという願望が、文通相手を見つけるということで充足されていたのではないかとということであった。

クラスター3

「不登校期間中は家にずっといた。でも毎日のように家の買い物など外出をし

ていた。」「家にいることは安心できたし、外に出るということも苦痛ではなかった。」といったように、主に家の中のことについて語ってくれた。

② クラスター間の比較

Bさん自身が関係あるとしたのはクラスター1とクラスター2で、クラスター1はいかに学校が嫌だったかということ、クラスター2はそれでも友達が欲しかったということでどちらも友達に関係しているとのことだった。友達の質は違うが良い意味でも悪い意味でも人間関係に関するまとまりだということである。

次に挙げられたのがクラスター2とクラスター3（不登校中の家の中のこと）の関連であり、この2つはどちらもコミュニケーションの手段として共通しているとのことであった。「家にいて誰も話し相手がいなかったから、友達が欲しかった。コミュニケーションをとる手段がなかったから外に出たかった。そういう願望の現われだと思う。」と話してくれた。

③ 全体の感想

「クラスターのまとまりはよく出ているなあという感じ。出てきている項目そのものはマイナスイメージのものばかりだけど、今思えばプラスの面を感じる。そのときは本当に辛かったけど、今思い出すと私にとってはとても必要で重要な時間だったと思っています。」と語ってくれた。

2. 調査者による総合的解釈

① 各クラスターについて

クラスター1

本人も述べているように学校に行くのが嫌で家にいるのに、先生や友達から電話や連絡があり、その苦痛の現れであると解釈する。また、項目全体のイメージがマイナスばかりであること、学校内の人間関係・先生との関係が不登校の一因と挙げられていることから、彼女にとって学校という場所は居場所のない苦痛なところであったと窺える。このことから<学校への嫌悪感>のクラスターであると解釈できる。

クラスター2

不登校期間中、ずっと家に閉じこもっている中で、やはり寂しさや孤独感を感じていたことが窺えるクラスターである。このことからこのクラスターは<人とのつながりへの願望>を表すクラスターであると解釈する。学校の友達は

必要ないが話し相手は欲しかったということで、全体としてマイナスイメージではあるが、その願望を満たす為に自ら文通相手を探し、その相手と継続して関係をつなげるというその行為自体には、ただ内にこもるだけでない外へ向かうエネルギーを感じる。また、主な話し相手は母親だったということで、少なくとも母親とのコミュニケーションは十分に取れていたこと、家にいる彼女を受け入れる母親の存在が、彼女の外の世界へ出ることへの欲求を促していたのではないかと考える。そしてこの文通相手たちとのコミュニケーションによって、学校の友達ではない何でも話せる友人を得るという経験をし、そのことが彼女にとってプラスであったのだと考えられる。

クラスター3

このクラスターには当時の家での生活について言及されている。学校での友達こそいなかったが家の中は彼女にとって居心地が良く、母親と話したりして時間を過ごしていたという。他の調査協力者に見られるように外出するのも人の目が気になるというようなこともなく、買い物など頻繁に外に出ていた。このように外の世界に対して全くとまではいかないうちが抵抗なく出られるというのは、安全基地としての家の存在があったのではないかと推測できる。したがってこのクラスターは<家庭を拠り所としての生活>を示すクラスターであると考えられる。

②全体として

Bさんの不登校の経験は結果として<学校への嫌悪感><人とのつながりへの欲求><家庭を拠り所としての生活>であり、学校・友達・家庭の側面で分けられていた。Bさんの不登校期間は合計すると6年と長い。会ったときの印象もおとなしそうで遠慮がちな様子だったが、振り返りの姿勢や調査者の質問に対しては迷うところなくはっきりとした返答だった。不登校当時の経験についても辛いことばかりの記憶しか出てこないが、今振り返るとその時期で得たものも多く、自分にとっては必要で、重要だったと述べており、肯定的にとらえている。したがって想起される事柄のイメージと、不登校経験の現在の受け止め方が違うパターンとなっている。

このように彼女が過去を肯定的に受け取れているということの一因はやはり安心できる家庭と、母親、会うことはないけれど文通を通して出来た友人の存在が大きかったのではないかと思う。挙げられた項目からも推測できるように彼女は人とつながること・コミュニケーションをとることに対しての欲求が強いが学校にそのつながりを求めたくはないという葛藤の状態であった。結果と

して学校の友達ではなく文通相手との友人関係の成功によって自信の獲得へつながったのではないかと思う。現在も看護の道へ進んだとのことで「人とのつながり」のある仕事を選択し、目指していることから彼女の人に対する優しさやエネルギーを感じる事が出来る。

一方で調査協力の依頼にあたってはすぐに快諾が出たにもかかわらず、直前に突然のキャンセルがあり、インタビューに対する抵抗のようなものも感じられた。看護学校も休学後に復学したという背景もあり、現在も彼女の不安定さを感じずにはいられなかった。振り返りのプロセスや「他に思い浮かぶことはありませんか」という調査者の質問に対する返答も、他の調査協力者は考え込んだり、突然思い出して話をしだしたりということがあったが、Bさんの場合は非常にスムーズであり、自分で消化できている範囲でしか答えないという防衛があったとも考えられる。これはインタビューに入るまでに調査者と1回しか顔をあわせていないことなどから考えられる信頼関係の構築の度合いも関係しているかと考えられるが、他の調査協力者が初対面にもかかわらず長時間話をするという事もあったので、彼女と特有の不器用さや防衛が働いていたのではないかと考えられる。

いずれにしても彼女に関しては、彼女本人の認知としては不登校当時の経験はまとまりのある完結したもので、結果としては肯定的にとらえており現在の生活と結びついているが、調査者の所感としては24歳という年齢も含めてまだ完結するには早く、もう10年して話を聞けば違ったものになっていたのではないかと考えてしまう事例であった。

(3) Cくんの事例

Cくんは24歳の男性である。不登校のきっかけは学校内の人間関係と勉強の問題であるとのことだった。不登校の期間は高校1年の後半までで、高校中退後、定時制高校を経て大学進学、1年遅れで卒業後、現在は派遣社員として働いている。

項目の想起における所要時間は15分程度、インタビュー時間は50分程度だった。項目数は17項目で6つのクラスターに分かれ、うちプラスイメージの項目が5個、マイナスが9個、どちらでもないが3個だった。図3がCくんの分析結果である。

重要順位の高い順に3分の1にあたる6項目を挙げると、

1：(-)挫折， 2：(-)屈辱， 3：(-)灰色， 4：(0)人間関係， 5：(-)幻聴， 6：(-)腹痛，であり，4番目の「人間関係」以外はすべてマイナスイメージがつけられている。彼の不登校経験においてのイメージは、味わった感情と身体に現れた症状でなりたっていること、また、想起される言葉がすべて単語であることが他の調査協力者とは異なっていた。項目全体のイメージとしてもマイナスが多く、プラスイメージの項目は、マイナス項目のほとんどを占める感情に関するものではなく、音楽とか読書とか名詞に限られていた。

< クラスタ 1 >

- 1 : (-) 挫折
- 2 : (-) 屈辱
- 8 : (-) 弱さ
- 9 : (-) コンプレックス

< クラスタ 2 >

- 4 : (0) 人間関係
- 7 : (0) 友達とは?

< クラスタ 3 >

- 5 : (-) 幻聴
- 6 : (-) 腹痛

< クラスタ 4 >

- 3 : (-) 灰色
- 13 : (0) むかむか
- 14 : (-) 根暗

< クラスタ 5 >

- 15 : (-) 家出
- 16 : (0) 悲しみ
- 17 : (+) 一人旅

< クラスタ 6 >

- 10 : (+) 親父
- 11 : (+) 音楽
- 12 : (+) 読書

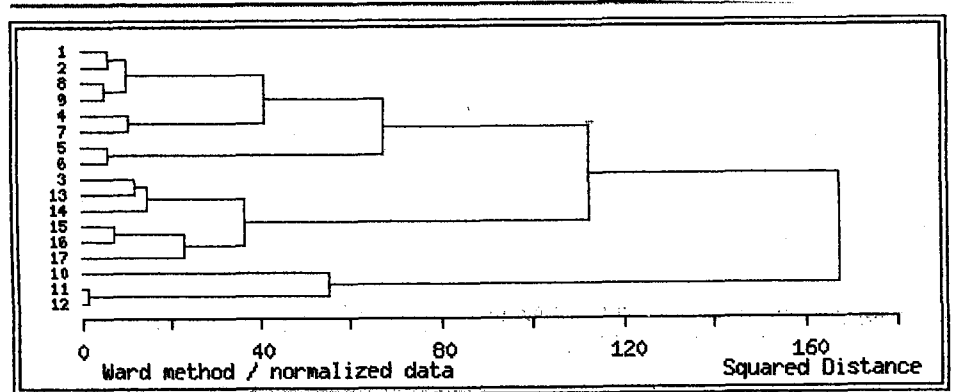


図1 Cくんの自由連想項目とそのクラスタ分析結果

*各項目に付した番号は本人による重要度順位である。

*各項目で付した (+) (-) (0) は本人によるその項目の感情的意味合いである。

1. 本人によるクラスターの解釈

①各クラスターについて

クラスター1

「高校1年の夏に高校を辞めたその時の気持ち」「もしかしたら今も続いているかもしれない気持ち」であると説明をしてくれた。そして言葉の意味の説明を求めると「自分を許せない気持ち」だと語ってくれた。また「この気持ちを体験することによって今の人格が形成されたとおもいますね」と締めくくった。

クラスター2

「4番は中3くらいの時からで思春期やからか、友達ってなんやろうみたいな、今思ったら、青臭いですけど。ものすごく孤独感を感じてました」また、彼は小中と9年間一貫だったのよそに高校に入り、「いきなり人見知りしたり人間関係でもめたり、うまく人間関係を形成できなかつたんだと思います。それが辞めた原因として大きい」と分析した。

クラスター3

「腹痛は高校に行くのが嫌だったから腹を下したというかんじ。腹痛は高校に行かなくなってなくなったけど幻聴は半年くらい続いた」「幻聴の内容は死ね死ね、みたいな。」と語ってくれた。

クラスター4

「これは高校辞めて定時制に入ってから3年間の気持ちです」「なんかモヤモヤというかイライラしてました」「定時制は単位制みたいなもんやったからサボりながら行けて楽は楽だったけど、楽しくはなかった。イライラしてました」「頭はおかしかったですね。今もおかしいけど」「暗い暗いって思っていました。今も暗いですけどね」

クラスター5

「家出はしようと思ってしませんでした。荷物もまとめていたんですけど。東京の方に行きたかった。なんかいい場所があるかなと思って。」「悲しいっていうのは今思ったら。自分に対しても親に対しても。その時は思ってなかったけど。その状態が。」「一人旅っていうのは親にお金もらって。司馬遼太郎を読んで幕末にはまっていたから。電車に乗って西日本を。定時制に入る前後で、家出は高校辞めた直前」「旅行自体は楽しかったけど全体的なイメージとしては

しんどいというかやばい時期だった」と当時を振り返った。

クラスター6

親父という項目に関して「親父が泣いた記憶があって、それで書きました」と説明を加え、父親の気持ちを「高校辞める直前か直後で。高校辞めるって当時はあまりないじゃないですか」「辞めてほしくなかったんだと思います」と解釈した。「読書や音楽は高校やめて定時制は入るまでの8ヶ月間。なにもしてなかったの」「高校辞めなくても本も読んで音楽も聴いたと思うけど、辞めたことによって没頭できて、それが人生のプラスになったかも。今から思えば良かったかも」と語った。

②クラスター間の比較

Cくん自身によるクラスター間の関係については、クラスター1とクラスター2の間に友達関係に関する感情があってそれがクラスター1の挫折感や屈辱感に直結してつながっているということであった。また、クラスター1の挫折感とクラスター3の身体症状は直接的ではなく精神と肉体のつながりで間接的につながっていると答えてくれた。クラスター1とクラスター4のイライラ・ムカムカした気持ちは、同時期に感じていたことなので似ているとし、クラスター1とクラスター5ではクラスター1のような感情を味わっていたから一人旅や家出といった逃避の感情が表れたとした。また、クラスター2の友達に関する問題とクラスター4のイライラ感については、「どちらも人間関係であり、クラスター2は高校時代、クラスター4は定時制時代のもの。クラスター2のような感情は定時制出るまでで、大学入ってからは考えても仕方がないからあんまり感じなくなった。大学は楽しかったけどもっと楽しくしたかった。」と話してくれた。クラスター2とクラスター5の逃避に関しては、「人間関係が色々あったから一人旅につながった。親とか周りの人から離れたかった。わずらわしさから逃げたかった」とのことだった。クラスター4とクラスター6について、どちらも現在までずっと続いていることだと語ってくれた。つまり、大学時代に入って考えても仕方がないからいらだった気持ちとか暗い気持ちとについて考えることは少なくなったが、インタビュー中にもあったように、未だに暗さは残っているということ、クラスター6については内容は違うが音楽や読書は今でも変わらず好きで続けているということ、継続の意味で両方ともつながっているということである。最後にクラスター5とクラスター6はどちらもとった行為であり、行動であるとしている。

③全体の感想

少し悩んだあと、「まとまりについてはあっていると었습니다。変なことはなかったです。全体的に感じたことは当時はしんどかったって言うのが一番です。まあ嫌な記憶だから記憶にストップかけているところはあるかもしれませんが。あんまり思い出したくもないけど忘れたくもない。この時期はこの時期で必要だった。必要とまでは考えてないけどあれだけの気持ちを忘れてはいけないというか、あの時あれだけ迷ったこととか味わった挫折感とか忘れてはいけないと思う。」と結論付けてくれた。

2. 調査者による総合的解釈

①各クラスターについて

クラスター1

すべてマイナスで形成されていることが特徴的である。いずれも高校を中退した直後の感情である。小学校と中学校が一貫で、友達関係についてもそれまでは悩むことなくこなしていたのに、外部の高校に出たことによって初めてクラスター2にあるような人間関係の問題に直面させられ、高校中退という道を選んだ。挫折感、屈辱感など、それまで味わったことのない感情をはじめて味わった、その思い出が不登校経験を思い出すにあたって一番大きく現れている。したがってこのクラスターは<中退に伴う挫折感>を表すクラスターであると考えられる。

クラスター2

これは、高校に入る前から少しずつとはいえ彼のなかのテーマであって、高校に入学してから突き当たった問題である。それまでは友達とは何かということ疑問に思うことなく過ごしてきて、いざ直面したときにどうしたらいいかが分からないと戸惑い、これがうまくいかないことで後に不登校へとつながってしまうわけではあるが、この時期に、人間関係について考える機会を与えられたこと自体はCくんにとっては貴重な体験であったと言え、そのことがこの2つの項目のイメージがプラスとゼロになっているのではないかと思う。したがってこのクラスターは<人間関係への直面>を表すクラスターであると言える。

クラスター3

このクラスターは<症状>に関するクラスターであると言え、どちらの項目もマイナスイメージである。腹痛は高校を辞めることによってすぐ解消された

が、幻聴は半年ほど続いたとのこと。「死ね死ね」といった内容であったということは覚えているとのこと、調査者によるしんどかったんだねという共感に対しては、「しんどかったけどいい思い出」だと答えてくれた。完全に症状に関するものなのでそれ以上のコメントはなかったが、嫌々高校に通っている最中の症状だったので、やはり精神的なところから来ているのだと思われる。

クラスター 4

このクラスターは定時制高校3年間で感じた感情であると説明してくれたので<定時制高校時代に感じたマイナス感情>を表すクラスターであると言える。定時制というシステムは彼にとって合理的で楽ではあったけれども、以前の高校で感じたように友達とは何か、人間関係の築き方について考えを深めていくには、学校そのものの存在が薄いように感じたという。その結果として、イライラ・モヤモヤと過ごしてしまい、楽しかったという評価にはつながらなかったのではないかと思う。

クラスター5

このクラスターは<逃避>に関するクラスターである。何から逃げたかったのかということとCくん自身が「わずらわしさ」と説明したようにやはり、家族であったりずっと家にいる自分であったり、気分が滅入るすべてのことから逃げたかったのではないかと思う。家出は高校を辞めた直後のことで、荷物まで準備していたけど、実行には至らなかった。当時は幕末の歴史に興味があったとのことと親の協力を経て一人旅に出たものの、内容としてはあまり覚えていないということだった。他に思い浮かぶことありますかという問いに対して、「全体的にしんどかった、というかやばかった」というコメントでまとめられたので、一見「旅」に関するクラスターのようにも見えるが、旅に出てなにかを得たかどうかというよりも、しんどかった、わずらわしさから逃げたかったという感情のほうが強く感じられ、「旅」に関するクラスターというよりも「逃避」の色のほうが濃いのではないかと思う。

クラスター 6

このクラスターは本人が述べるように<高校中退後の行動>に関するクラスターであると言える。音楽も読書も高校を辞めなくても触れていたとは思いますが、この時期に読んだことで人生のプラスにはなっているという本人の分析だった。というのは高校辞めてから定時制はいるまで8ヶ月ほど彼には空白の時間があり、そのことでやはり負担を感じていた、両親も同じで、お金を出すか

ら旅行でも行って来いというように、何かせすにはいられなかったのではないかと思う。他の人にも共通して言えることだと思うが、高校生でも大学生でも、社会人でもないという気持ちはやはり本人たちにとって辛いものと思われる。「何かを吸収しなくては」という思いが共通してあるのではないかと考える。

②全体として

彼のクラスターは<中退に伴う挫折感><人間関係への直面><症状><定時制高校時代に感じたマイナス感情><逃避><高校中退後の行動>で構成されていた。中心となっているのは学校に関するマイナスの感情、身体症状、友達、窮屈感、不登校によって得たものである。Cくんの全体的な印象としては物静かでおとなしいイメージであった。初めのうちは緊張気味だったが、こちらの質問に関しては素直に答えてくれ、正直な人柄がうかがえた。

他の協力者に見られなかった特徴としては、自由連想を始める際に文でも単語でも自由に書いてくださいと教示したにもかかわらず、すべて単語で表現されていたことである。また、調査者の質問に対しても幻聴の内容など驚くほどありのままに答えてくれたが、そこから話が膨らむということもなく、単に事実を答えるという様子であった。このことから他の5人がそれぞれの想起項目にス通りやエピソードなど「付け足し」があったのに対して彼にはそういうものがなかった。

また、特徴的なこととして「今でもそうですけどね」という自己分析が多かったことがあげられる。本人が述べているようにクラスター1の挫折感や、屈辱感、コンプレックスなどが今の人格を形成している、当時の「自分のことが許せない」という気持ちが今でもある、今でも頭はおかしいと思っている、今でも自分は暗いと思っているといったように、Cくん自身は不登校経験を経て考え方や人生観が変わったと言及しながらも、当時とつながったまま現在まで過ごしているような印象を受けた。しかし、だからといってCくんが現在の自分自身の性格をマイナスにとらえて、改善を望んでいるのかと言えばそうではなく、それも踏まえて「自分はこういう人間だ」と受け入れているようにも思えた。また、他の調査協力者と比較して、Cくんのインタビュー中に考える時間の長さや感想からは、不登校について初めて深く考えたという印象を受けた。今回のインタビューが彼にとっての不登校経験に対する初めての直面化だったと仮定すると、このことも彼の想起の項目が単語ばかりであったことの原因のひとつであるのではないかと考えられよう。

また、家族関係について、具体的にどのように両親とかかわっていたかということは分からなかったが、旅行費用を出してもらったり、中退までの時間の

短さやスムーズさなどから、彼の場合は家に居やすかったのではないかと思う。「お父さんが泣いた」という記憶は彼の中でプラスイメージの映像として印象に残っているということからも、このことが窺える。

充実感尺度得点に関しては、全体的には青年期の平均的な水準であると言えるが、自立・自信の側面だけは得点が低めになっている。先に述べたようにCくんは自分を「今も暗い」「あたまがおかしい」と評価しているものの、それが自分自身だと受け入れている様子であり、インタビュー時も「来週から仕事が決まっている」状態であることを考えると、彼の自立・自信得点の低さが何かを意味しているようには思えなかった。

不登校経験に対しては今現在、肯定的・否定的のどちらでもないと答えている。彼の場合は不登校経験を「しんどかった」「もしかしたらストップをかけているかもしれない嫌な記憶」だと認知し、想起項目のイメージもマイナスが多かった。それでも「どちらでもない」と回答しているのは、「しんどかった」と思うのと同時に、最後の最後、沈黙のあと「あんまり思い出したくもないけど忘れたくもない。この時期はこの時期で必要だった。必要とまでは考えてないけどあれだけの気持ちを忘れてはいけないというか、あの時あれだけ迷ったこととか味わった挫折感とか忘れてはいけないと思う。」と説明してくれたように、味わわずにすんだのならそれで良かったけれど、経験したからにはこれからの人生の中で忘れてはならない経験だと、想起されてくるマイナスイメージを相殺する意味での「どちらでもない」ではないかと解釈する。

(4) Dくんの事例

Dくんは現在大学の4回生であり、就職活動中である。不登校の期間は中学校の3年間。ただし高校も単位制だったのでカタチだけ在籍していたとのことで、実質的には6年間だが、本人曰く「完全」な不登校は3年。不登校になった原因としては学校内外の人間関係を挙げていた。自由連想到に要した時間は30分程度、インタビューは1時間弱であった。

連想項目は25項目で、プラスイメージが14項目、マイナスが7項目、どちらでもないが4項目であり、4つのクラスターに分類された。図4にDくんの分析結果を示した。

< クラスタ 1 >

- 1 : (+) 自由
- 10 : (+) 我思うゆえに我あり
- 13 : (+) 偏見をなくそう
- 2 : (+) 他人を知り世の中を知ることの大切さ
- 3 : (+) 自覚的な自信の獲得と蓄積
- 4 : (+) 所属やライフスタイルに依らない柔軟性の獲得
- 6 : (+) 行動せねば何も変わらない
- 9 : (+) 動いてから考えたほうが往々にして良い結果を生む
- 5 : (+) 不登校をいかに社会的にプラスな形で言葉にするか
- 15 : (+) 開放感

< クラスタ 2 >

- 7 : (+) 我只足知
- 8 : (+) 敵を知り (他者) 己を知り (自分) 地の利を知れば (環境) 百戦危うからず
- 11 : (+) 経済的生活条件をいかに整備するか
- 12 : (+) 学校の社会的機能について考える

< クラスタ 3 >

- 14 : (0) あれこれ考える癖がついた
- 18 : (0) 年のわりに気合の入ったオタクになった
- 21 : (0) 不登校による対人スキルの未発達
- 24 : (-) 世間的な価値観の否認
- 23 : (-) 所属やライフスタイルによる自信の得がたさ

< クラスタ 4 >

- 16 : (-) 面倒くさい
- 19 : (-) ひま
- 25 : (0) 諦め
- 17 : (-) 眠かった
- 22 : (-) 窮屈
- 20 : (-) あせり

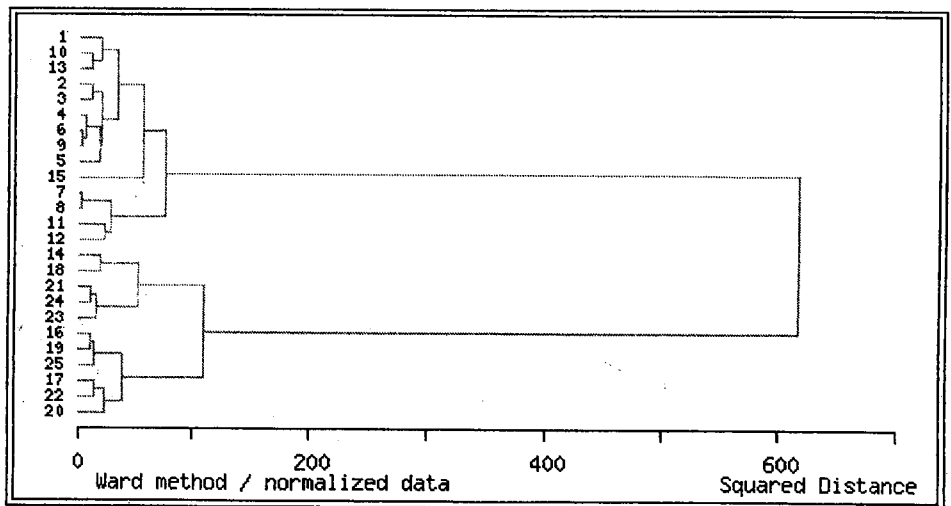


図 4 Dくんの自由連想項目とそのクラスタ分析結果

*各項目に付した番号は本人による重要度順位である。

*項目で付した (+) (-) (0) は本人によるその項目の感情的意味合いである。

重要順位の高い順に3分の1にあたる8項目は以下の通りであり、すべてプラスイメージの項目で構成されていた。

- 1 : (+)自由
- 2 : (+)他人を知り世の中を知ることの大事さ
- 3 : (+)自覚的な自信の獲得と蓄積
- 4 : (+)所属やライフスタイルに依らない柔軟性の獲得
- 5 : (+)不登校をいかに社会的にプラスな形で言葉にするか
- 6 : (+)行動せねば何も変わらない
- 7 : (+)吾只足るを知る
- 8 : (+)敵を知り(他者), 己を知り(自分), 地の利を知れば(環境), 百戦危うからず

Dくんの場合は最も重要だと思う項目として「自由」が出てきたという点だが、他の調査協力者とは大きく異なるところである。また、この重要項目の多くが彼の生きていくうえのモットーとしているような言葉ばかりである。項目ごとのイメージも25項目中プラス項目が14個、マイナス項目が7個、どちらでもないが4個であり、プラスの項目が非常に多い。また、想起された項目の多くが格言やことわざであることも、彼がいかに自分の経験と向き合い方向付けていたかを示唆していると言えよう。

1. 本人によるクラスターの解釈

①各クラスターについて

クラスター1

「大体どれも今振り返って思うこと」「不登校を経験することで今の自分になる。その当時よりプラスになった物事」と共通する点を挙げ、「10番2番9番6番は引用文。言葉が先にあって経験して価値判断できるようになったもの」「1番13番3番4番5番15番は大学生活の中で経験が先にあって後から言葉になったもの」と2種類に分類した。開放感についての説明を求めると「不登校をやっていると窮屈でもあるし開放感もある。今も(上記項目のようなこと)を実践していると、どうしても人付き合いが出てくるわけで、それはプラスの面でもあるけれど、やっぱり今でも誰にも会いたくないという時間もあるし、休日にひとりで部屋にいる時とかそういう時は昔ながらの不登校をやったときに感じる開放感と近い。これは今でも続いているもの。」と説明してくれた。

クラスター 2

「現実的な処世術をあらわしたもの」「クラスター1に比べて实际的、クラスター1がここ1年に考えたことに対して2は2回生くらいまでに思ったこと」と比較している。学校の社会的機能について説明を求めたところ「集団生活に慣れるとか、部活とかで言えば縦社会に慣れる。で、そこを通して会社に入ってからやっていけるような、コミュニケーションの基礎みたいなのを学習する場所、というのが社会的機能ってことかなと。この間企業の面接とかに言ってきたときに、自分が不登校やってましたっていうことを言ってるんですけど、やっぱりそこで、最終面接とかになると経営者の方が来られるんですけど、経営されている方にも、学校行ってないんやったら縦社会の人間関係とか、部屋の中で固定のメンバーの中においてどうやって付き合いやっていくとかとか、やっぱり上の人間とか下の人間とかどう付き合うとか自分と考え方の違う人と会ったときの対応みたいなのは学校行ってない分不足があると思うんですけど、それについてどう思う？みたいに聞かれましたんで。不登校のときにこんなこと考えていました。って言ったら泣いてもらいました」「(大学時代は)それだけ自分の中で考えができてまとまった期間」また、経済的生活条件について「高校はどうするかってなったときに学校の担任の先生に学校に行くか行かないかは自由やけれど、現実問題、中卒やったらつける仕事はほとんどないでと。で、高校は入ったときも大学行くか行かないかは自由やけれども、やっぱり現実問題、高校出てつける仕事と、大学出てつける仕事とでは差があるし種類も全然変わってくるから、で、不登校、少なくとも人との接触が少ない状況にい続けたら、経済的な基盤を築いて行くのはすごく難しくなるよ、とって諭されたのもあって、で、今もそういう考え方が根にあるから就活(就職活動)とかもするわけですし、やっぱり働くことを前提に、前提とかいつかは働くやろうなど。今もそうですけど、大学に行く学費払ってもらってるっていうのと中学はまるまる学校行ってないですけど、学費はやっぱり払ってもらっていたわけで、そういう面で、親に対する負い目じゃないですけど経済的な借りみたいなのもあるし、ぜんぜん方向は違いますが、不登校とか引きこもりの状態でそのままの状態はどうやって経済的にやっていけるかっていう考えとかもありますし。」と、説明してくれ、最後に「最終的にどこに落ち着くのかはわかりませんが」と締めくくった。

クラスター 3

「これは不登校当時に考えていたことやっていたこと」「不登校した事でマイナスになったことであり同時に解決するための課題」であるとまとめてくれ

た。世間的な価値観の否認については「流行りにのるのはしょうもないといった若いときにありがちのもの。今は誰がどんなもの好きでもいい。話してておもしろかったらそれでいい」と説明してくれた。「全項目ひっくるめてプラスでもありマイナスでもあること」とし、その中で「21番は直接的にマイナスだけだからこそ解決するための課題」「あれこれ考える癖があるっていうのはものをじっくり考える悪くない習慣だとは思いますが。それで逆に頭がウワァってなったりとかして、そういう面ではマイナスになる。」「21・24・23 はつながっていて、これはこれからの課題」と語ってくれた。

クラスター4

このクラスターは「不登校していた時に感じてたことで、もうぼちぼち卒業せなあかんって思ってること」だと説明してくれた。窮屈感に関しては「学校行かなあかんのは分かってるけど行きたくないって感じ。で、ストレスたまると眠くなる。そういうつながり。窮屈もあるけど開放感もあるし。やっぱ学校行ってないことから窮屈も感じるけど行ってないっていうので逆にまた開放感もあるし。」とし、「面倒くさいっていうのはもう窮屈とか開放感とか考えるのも面倒くさいって感じ。で、結局寝るばかりになってたり。焦りはいつになったら社会復帰出来るんだろうとか。人並みな生活を送れるのかなあとか。諦めと面倒くさいは結構似てると思うんですけど、この後にああこれで終わり、みたいな。不登校してることの諦めではなくてもう生きること自体の諦め。」他に思い浮かぶことはありますかという質問に「今でもちょっとは残ってるけど、基本的には乗り越えてきたことです。さっきほど表面的ではないけれど、さっきより深いところですね。一番自分に近い。一番感情的な言葉が詰まっていますね。言葉も短くなるし。」と分析してくれた。

②クラスター間の比較

クラスター間で関連のあるものとして、クラスター1とクラスター2は「昔から地続きになっていること」ということであった。クラスター1は不登校経験を今振り返って得たことであり、クラスター2は現在の生活をしていく上で重要なことである。Dくん曰く「どちらかというとならばクラスター1のほうが上位。当面というか中心的な課題。通りあえずクラスター1を片付けてから2に行く。そういう意味のつながりがある」とのことだった。次に、クラスター1とクラスター3については、クラスター1に対してクラスター3は不登校を経験してマイナスの影響を与えていることである。この経験を踏まえてクラスター1のような考えに至ったということである。「今までちょっとマイナスになってい

たところ(クラスター3)を乗り越えて、こっちのほうへ行きたいなあと思っている」とのことだった。また、クラスター1とクラスター4に関して、これは不登校当時のマイナスの感情である。このクラスターは「価値観が逆になっている。理想としてはこっち(クラスター4)を全部取っ払ってこっち(クラスター1)に行きたいなあ。って。」「クラスター4は当時思っていたことで、今やっていく上ではもうぼちぼち全部は無理で、ある程度は削っていかないといけないこと。

これから社会に出てやっていくうえではしんどいと。クラスター1に行くために乗り越えていかないといけないこと。そんな感じで、近いというか関係はある。」ということだった。

次にクラスター2とクラスター3との関係について、クラスター2は現在の生活で重要な事であり「こっち(クラスター3)を乗り越えてこっちに行きたい。ということ。こういう経験(クラスター3)をしたから、これからこういう方向(クラスター2)に移っていきたい。難しいなあと思ったり否認したり、そういうことを考えてつながっている」ということだった。

クラスター3とクラスター4は「ほとんど同じ時期の事」ということであった。クラスター4のような感情を抱いていたから、行動のレベルでクラスター3のような結果になってしまったということである。クラスター4が感情で、クラスター3がクラスター4に基づいて出てくる行動という意味でつながっているということである。クラスター4は今でもある程度残っているけど、クラスター3のような行動レベルではあまり残っていないとのことだった。そしてクラスター3についても、行動のスタイルとか考え方とかを変えていったら変わっていけることだとしていた。

2. 調査者による総合的解釈

①各クラスターについて

クラスター1

項目ごとのイメージはすべてプラスだった。出てきた項目は「言葉が先にあって経験して価値判断できるようになったもの」「大学生活の中で経験が先にあって後から言葉になったもの」に二分されており、すべて<不登校から得た言葉>に関するクラスターである。現在、不登校経験を「肯定的」と認知しているDくんの、「不登校から学んだと」の集大成のように感じる。開放感に関して、「不登校をやっていると窮屈でもあるし開放感もある。今も(上記項目のようなこと)を実践していると、どうしても人付き合いが出てくるわけで、それはプラスの面でもあるけれど、やっぱり今でも誰にも会いたくないという時間

もあるし、休日にひ通りで部屋にいる時とかそういう時は昔ながらの不登校をやっていたときに感じる開放感と近い。これは今でも続いているもの。」と説明してくれた。学校に行かずにずっと家にいる時に「窮屈感」を感じるというのは理解しやすいが、同時に「開放感」を感じるというのに少し驚いた。しかしこの相反する「開放感」と「窮屈感」についてはDくんだけでなく何人かの調査協力者のインタビューからも述べられたところだったので、後でもう少し深く考えてみたいと思う。

クラスター 2

このクラスターは本人の分析どおり<現実的な处世術>を表すクラスターである。クラスター1も2も、格言や引用文で占められているが、その違いとして「クラスター1に比べて实际的、クラスター1がここ1年に考えたことに対してクラスター2は2回生くらいまでに思ったこと」であると説明してくれた。つまり、中学高校と、「不登校」という人生の大きな壁にぶつかった後、大学に入り、1回生と2回生の間は自分の足りないところを知ること、他者・自分自身・環境について理解すること、縦社会には慣れなくてはならないということ、大学を出たほうが、就職などその後の人生の選択肢が増えるということを学び、3回生から4回生にかけてクラスター1のような課題を自分の中で確立したようである。つまり大学の4年間かけて彼なりに「不登校経験」を消化し、いかに語るか、プラスにするかということについて答えを探してきたのだと解釈する。また、他の調査協力者(Fくん)においても、不登校だったという事実は「就職活動」に大きく影響することが語られていた。不登校経験者に貼られる「集団の中での人間関係が作れない」というレッテルに対して、それをどう打破するか、ということが大きな課題となるようである。

また、それ以前にDくんの場合は不登校中であっても漠然としたイメージではあるとは言え「就労」を前提にしていたということである。それに関連して両親に対して、「大学の学費を払ってもらっている」「不登校の中学時代も学費は払ってもらっていた。」という「経済的な借り」みたいなものを感じているということだった。これ以外には両親に関しての話は出てこなかったが、彼にとって就労・自立が両親に対する現段階での親孝行の手段であるのではないかと感じた。最後の「最終的にどこに落ち着くのかは分からない」というのは現在就職活動の最中であり、内定はいくつかももらっているものの自分はどこに行くのか、何を選ぶのか決めていないという状態を反映しているのではないかと思う。しかし就職活動そのものは彼自身にとって「不登校経験をプラスにし、まとめをする作業」として有意義なものであり、同時に自信につながったのでは

ないかと思う。

クラスター3

このクラスターは<不登校に伴う明暗>を表すクラスターである。本人が述べる通り「不登校当時に考えていたことやっていたこと不登校した事でマイナスになったことであり、同時に解決するための課題」である。不登校をするということは集団の所属から外れるということであり、そこからの自信を得ること、コミュニケーションのスキルが育たないこと、ひとりであれこれ考えてパニックに陥ってしまうこと、社会に対してシニカルな目で見ってしまうということ、いずれもマイナスの面である。しかし、これはプラスに転じることが可能であり、Dくんにとっての課題になっているということである。

クラスター4

このクラスターは想起項目が単語で短くなっていることが今までのクラスターと大きく異なっている。引用や格言も入っていないところから一番素直な感情、それも不登校経験者が誰でも一度は考えるような焦りや、諦めなどの感情であると推察できる。これまでの項目が不思議なほどプラスイメージが多く、他の調査協力者との違いが顕著だったが、このクラスターをDくん自身が「一番深い感情だ」と語ってくれたことは、調査者にとって腑に落ちる思いだった。したがってこのクラスターを<不登校当時のマイナス感情>であるとする。Dくんによれば、「この感情は今でも少しは残っているが基本的には乗り越えていた」とのことである。「これから社会に出てやっていくにはふさわしくないの、感情として持っていることはいいが、それを前面に押し出すようなことにはならないようにしていかななくてはならない」と言う、決意の面もあるのではないかと思う。

②全体として

彼の不登校の経験は<不登校から得た言葉><現実的な処世術><不登校に伴う明暗><不登校当時のマイナス感情>であった。内容を大きく分けると「家族」「就職」「不登校を経験して得たこと」「窮屈感」「開放感」などが挙げられる。インタビューを通しての印象として、Dくんは自身の不登校経験について本当に深く考えたのだろうと感じられた。と、いうのは、やはり昨日今日、不登校経験について考えたのではDくんほど格言や引用文、自身作の格言は出てこないと考えるからである。もともとの性格的なものもあると思うが、中学

校を卒業して自分の道を一つ一つ選んでいくにあたって様々なことを考えてきたのだと思う。彼自身に対しては線が細く、おとなしそうな印象を持ったが、その語り口からはエネルギーが感じられたし、こちらの質問や説明を求めたときでも、ほとんど迷うことなく沈黙もなく、進められた。逆にそのこと自体が「用意してあることしか話さない」という姿勢であるとも取れなくはなかったが、最後のクラスターでの発言などから、生きること自体の諦めや、焦りなど、そういう面もやはりあったのだとも話してくれたので、色々な面からの話が聞けたと思う。また充実感得点においては、自立・自信と連帯が青年期の平均的水準よりもむしろ高かった。この自立自信の高さは不登校を乗り越え、そのことで得た自信にもつながっているのではないかと思う。連帯感が高いということは周囲との関係における連帯感であるが、今回のインタビューの中では友人関係については話を聞くことが出来なかった。他の調査協力者全員が友人関係について語っているのに対して彼に関しては、社会でやっていくためのコミュニケーションの話は聞けたものの、不登校当時のキーワードとしては出てこなかった。ただ、大学のゼミの中でも中心となっているような様子だったので、本人の述べていたように現在はうまくいっているのだということは窺えた。

他にDくんの中で特徴的だったことは「開放感」である。彼自身の言葉から「開放感」を定義すると「誰からも文句を言われずに自由にのびのびできること」である。この開放感を得るために経済的にも何とかしなくてはならないし、学校の中や、対人関係においても要領よくやっていかなくてはならない、そういった意味で使われているようである。ただ、本人いわく、「学校に行っていないことの消極的な開放感ではなく自分で地に足をついた生活をした上での開放感」でないとならないとのことであった。学校に行かないことの窮屈感、開放感以外の調査協力者にも共通して出てきていたが、Dくんの開放感はその自体が「人生の現実目標」といった形で位置づけられていたので、彼特有のものであると思う。いずれにしても、彼はすでに彼自身において「不登校経験」で得たこと、失ったことについて考察済みであり、それを生かしながら現在の生活を送っているのだということが伝わってきたインタビューであった。

(5) Eさんの事例

Eさんは女性で24歳。大学を長期休学の状態で現在は派遣社員。不登校期間は中学校2年から3年まで。原因としては学校内での人間関係を挙げている。自由連想時間は30分強。インタビュー時間は1時間強であった。

想起項目は全部で27項目であった。27項目中プラスのものが5個、マイナスが15個、どちらでもない7個、全部で6つのクラスターで構成された。図4にEさんの分析結果を示している。

<クラスター1>

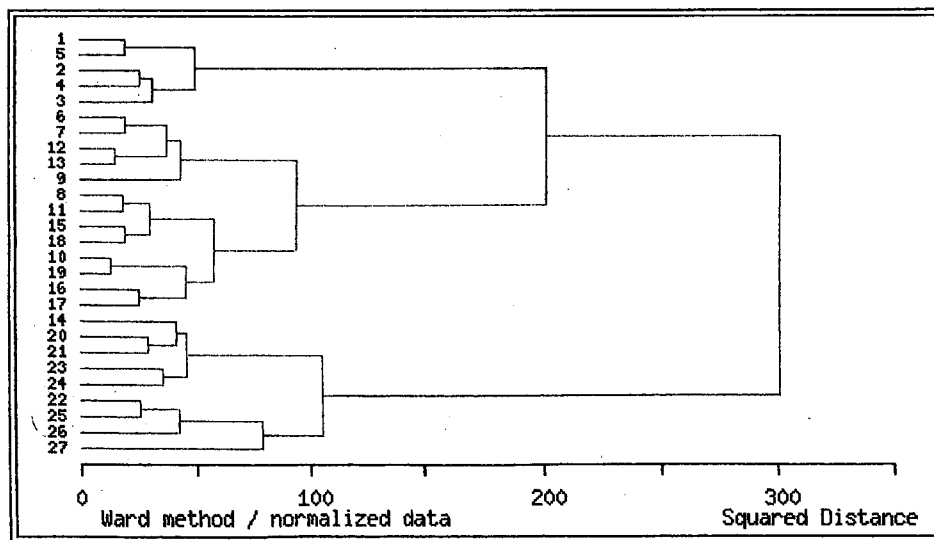
- 1: (+) どこかに行きたい 誰かたすけて
- 5: (+) 居場所がない 人生の目標は自分の居場所を見つけることだと思った
- 2: (+) 死にたいとは思わなかった だってまだ幸せじゃない
- 4: (-) 抑圧 安息できる場所は? どこかに行きたい、でもどこに? お金もない、行くところもない 一人でなにができる? 中学生。 自由がない
- 3: (-) 叫びたい 抑圧感 どうしたらいい

<クラスター2>

- 6: (-) 家の中で超音波がとびかっているみたい
- 7: (-) 家の中はめちゃくちゃ
- 12: (-) 怒るお父さん
- 13: (-) 怒るお母さん
- 9: (-) ヒステリー

<クラスター3>

- 8: (-) 笑顔はない
- 11: (-) 自分の部屋のふとん
- 15: (0) 涙
- 18: (0) 夜、みんなが寝静まったらやっど。心がちょっと安らげる時間。空想ににげれている時間は現実を忘れられる。でも体ん中でさけんでる。誰か助けてどこか遠くに行きたい。くるしい。



<クラスター4>

10:(-) きっと殺意にかられたこともあったような。父, 母に。でもしなかったのはこんな奴らのせいで殺人者にはなっていたまるか。この人たちの為には私は犯罪は起こさない

19:(-) 多分毎日神経はりつめてた

16:(0) くやしい。どうでもいいじゃない?それほど対したことじゃない。うるさい。みんな騒ぎすぎ。なんでみんなと一緒にじゃないといけないの?世間体。

17:(-) 朝。お母さんが起こしにくる。水をかけられたり。ふとんもどぼどぼ。お父さんが来てけられたり通りあえず力づくで外に出されたり。かばんと共に。3階のドアの前から外にかばん放り投げて階段に座ってなんかひまつぶし道具ないか考える。

<クラスター5>

14:(-) 家のドア

20:(0) 家に来る先生(大変だな先生も)何かとどけにくるクラスメイト。全部なんかしらじらしい。なんでみんな学校に行かそうとするんだろう。ちがう価値観はないの?

21:(+) 私自身は学校に行かなくても友達がいてくれて楽しかった。これは唯一のすくい。

23:(+) しょうらいなんてどーとでもなる。なるようになる。なんで学校行かなかったらそこで人生まっくらみたいになるの。

24:(0) そう言えばゴハンがあんまり食べられなかったっけ?今考えるとあれは拒食症?吐き気がした。

<クラスター6>

22:(-) せなかけられたり

25:(-) 大人はきたないと思ってた。大人になりたくなかった。周りの大人に希望はなかった。思春期。

26:(-) 精神科みたいなとこ?笑っちゃった。ホントにりんごの木描くんだ。

27:(-) そう言えばお父さん10万円あげるから学校行ってとかも言ってたっけ?私の感情はお金では買えません。(これはだいがく?)

図5 Eさんの自由連想項目とそのクラスター分析結果

*各項目に付した番号は本人による重要度順位である。

*各項目で付した(+)(-)(0)は本人によるその項目の感情的意味合いである。

重要項目の3分の1にあたる9項目は次のものであった。

- 1 : (+) どこかに行きたい 誰かたすけて
- 2 : (+) 死にたいとは思わなかった だってまだ幸せじゃない
- 3 : (-) 叫びたい 抑圧感 どうしたらいい
- 4 : (-) 抑圧 安息できる場所は? どこかに行きたい, でもどこに?
お金もない, 行くところもない 一人でなにができる? 中学生
自由がない
- 5 : (+) 居場所がない 人生の目標は自分の居場所を見つけることだと思った
- 6 : (-) 家の中で超音波がとびかっているみたい
- 7 : (-) 家の中はめちゃくちゃ
- 8 : (-) 笑顔はない
- 9 : (-) ヒステリー

重要項目の上位に関してはプラスイメージのものが3個, マイナスイメージのものが6個であり, どちらでもないはなかった。一見したところプラスの項目もあまり明るい内容ではないが, そのような気持ちを経験することで人生の目標や意味について考えることができたと本人が感じているがゆえのプラスではないかと感じた。マイナスの項目に関しては抑圧感, 窮屈感, 家庭の中の様子が挙げられていた。

項目全体のイメージについてはマイナスが圧倒的に多かったのでEさんの不登校経験に伴うイメージはマイナスの記憶で構成されていると言える。

1. 本人によるクラスターの解釈

①各クラスターについて

クラスター1

「(不登校経験を) 要約したかんじ」とまとめ, 「こういうことを思う頻度が多かった」「思い浮かんだ順が重要順」「最初に浮かんだのが単語で, 当時の状況風景が思い浮かんで感情が思いうかんだ」と, 想起のときの状況とあわせて語ってくれた。

クラスター2

「お父さんお母さんがいて家の中」のイメージであるとし, 「ヒステリーを起こすのも父母」であり, 「両親の影響で妹たちにも伝播して, 家の中はめちゃくちゃだった」と, 当時の家庭内の状況を振り返った。さらに「うちの家はみんなヒステリーなのかも。両親の影響を一番受けたのは(2歳下の)妹」「とにかくめちゃくちゃだった」「うちはみんな手が出るから」「お母さんは特に」「小

学生の頃はぱっと顔の周りに手が挙がっただけですごくびくっとしてたのを覚えてる」と、家族全体の気性の荒さなども含めて、説明してくれた。

クラスター3

布団については「布団ひいてあったし」「夜は布団の中で考えるし昼間はたたんであるけど朝と夜はひいてある」と部屋の中のイメージから語ってくれた。

「涙は感情的な感じだけど笑顔がないのは日常」「世界が狭い感じ」「夜は部屋に誰も来ないから落ち着く」「朝に寝てるから夜は眠れなくなって考えてしまう。内容はクラスター1のようなこと、色々考えてもそこにたどり着く」と、当時の状況について振り返ってくれた。

クラスター4

「19番がこれは全体的、10番16番17番は日常で、その真ん中で神経が張り詰めていたということ」「神経が張り詰めていた毎日に考えていたこと」「今思うと神経が張り詰めてたと思うけど、当時は自覚がなかった」「殺意もあったんだろうけど愛情がないわけでもなかった」と説明を加えた。「(両親が)いなくなったら困る、死んだらちょっとは泣くやろうとか、別にいなくなったらいなくなったでいいけど。」「お父さんお母さん死んじゃったら楽になるやろうし、そんな事が起こったらちょうどいいなあと思ってた。でも多少は泣くかな。情はあるもんなあと思ったり。」自分で何かしようとは思わなかったのかという質問には「こんなんの為になんで私が犯罪を犯さなあかんのかって感じだった。」水をかけられたことに関しては「これこそヒステリー？でもちょっと違う。お母さんも病んでたんでしょね、どうしようもなかった、どうにかしたかったんやろうけど」「お父さんもお母さんも短気で、この頃は私のことでよくけんかしてた」「全部が悪循環」と、当時の自分と家族について分析を加えた。

クラスター5

「家の中ではなくて全部外でのこと」とまとめ、「あの頃はご飯食べたら気持ち悪くなってた。味が濃いと特に。食べたらウツてなってた。」教師については、「先生も大変やなって」「家のドアは外に(追い)出された時のイメージ」「親にしても先生にしても学校っていう選択肢しかないんやなって思ってた。」Eさんには他の選択肢があったのかという質問には「学校じゃなかったら学校じゃなくてもいいって思ってた」「でもこの頃はフリースクールとか全然だった」と振り返った。「(今はクラスに一人くらい不登校の子がいるから)先生の対応も違うのかな」「先生とかクラスメイトが届けにくるとかそういうのに何の意味

があるのかなって思ったり」していたと語ってくれた。

クラスター6

「26番と27番はおまけで思い出した。いつのことか覚えてなくて、もしかしたら大学するときかもしれない」と補足し、「(精神科は)おもしろかったけど(りんごとか木とか)ほんとに描くんだって」と笑った。「この頃の大人のイメージと今、私が思ってる大人のイメージとはだいぶかけ離れてる。思春期やからかな」「大人って、きたなーいっていうイメージ」「今自分が大人だとは思えないけどでも、大人になりたいと思う」「今は大人にすごく憧れる。いいイメージで大人になりたい」と「大人」に関して、時間をとって語ってくれた。

②クラスター間の比較

クラスター1とクラスター2に関して、「クラスター1の家の中＝クラスター2の気分になる、家の中がクラスター2を生み出す。両親の中にあるヒステリーが、クラスター1のような感情を生み出す」と答えてくれた。クラスター1とクラスター3との関係は、自分の部屋の布団の中でよく考えたこと、感情面で近く、どちらも「夜」のイメージということで共通しているとのことであった。またクラスター1とクラスター4については「どちらも似たような感情、似たようなテンション。似たような感情の高まり。この頃悔しくてよく泣いていたような気がするので悔し涙のイメージ」としている。クラスター1とクラスター5に関しては、「クラスター5は昼間、1は夜でテンションが違う。お昼は冷静になることもあるけど1は感情があふれているとき。5は、昼間のお日様のイメージ。テンションの違い。」と語ってくれた。クラスター2とクラスター3は昼間のことと夜のこととで時間帯の違い、と話してくれた。またクラスター4も昼間の時間帯なので、クラスター2と時間的に近いとのことであった。クラスター2のような状態が神経を張りつめさせ、朝は具体的な話ができる状態ではないので、クラスター2や4のような時間に家族と話をする。殺意に関しては夜考えることがほとんどだと語った。クラスター2とクラスター5に関しては、「クラスター2は内側で5は外側。外というのは学校とか世間体とか。表裏一体というよりフィルターを一枚通した感じの関係」だとした。またクラスター2と6に関しては、2の補足が6であり、家庭内の状況の補足としてのクラスター6であるとした。クラスター3とクラスター4は似たような感情・状況で朝か昼かの違い、ひとまとまりでもおかしくなかったと述べた。また、クラスター4とクラスター5についてクラスター4のような家族に対する感情が先にあって、それが5の外の世界に向かっているということであった。そし

て、クラスター4についてその補足がクラスター6であるということである。朝の状況の補足である。補足がつくということはひとつのエピソードができて、そこから連想されたものが想起されているということだった。

②全体の感想

今回出てきたこのまとまりはEさんにとって納得いくものでしたかという質問に対して「一番最初のクラスターがほんとにまさにこのまとまりやなあって思った。2番目もすごく腑に落ちるものだった。下に行くにつれてばらばら度は増えていくけど構造全体としては腑に落ちるものだった」と述べた。

2. 調査者による総合的解釈

①各クラスターについて

クラスター1

このクラスターは本人が述べる通り<不登校経験の中心>を表すクラスターである。学校に行かずに夜、ひとりで布団の中で考えていたことが鮮明に思い浮かんだとのことであった。このような感情が表現された項目が上位に挙がってきたのがEさんの特徴である。また、死にたいと思うことの内容について、死ぬより生きたほうがましだと述べた協力者もいた中で、彼女は「まだ幸せじゃないから死ねない」というものだった。ここからは、苦しいと思う日々を過ごしながらも、自分の居場所を見つけることが人生の目標だと、自分自身を見つめていたのだという様子が窺える。それがわかっていながらも、まだ中学生で自分ひとりでは何もできない、どこにも行かれないという窮屈感、抑圧感に支配された状態なのだということが分かる。

クラスター2

このクラスターはマイナスイメージの項目ばかりで構成された<当時の家庭内の状況>を表すクラスターである。本人の言うところの「超音波」これはピリピリとしたムードのようなものだと考えるが、そういったものが家中に流れていた家庭内の状況である。自分の家族はみんな短気であるということで、両親をはじめ姉妹達もヒステリックになっていて、まさに悪循環の状態である。このように家の中の状態が思い浮かぶということは、ある意味で彼女にとって、家族とのかかわりがとても濃いものであったからだと考える。他に両親の協力のもと、家の中は安全地帯だったという例がある中で、少なくとも彼女自身にとっては家族が味方ではない、自分の部屋だけが安全地帯だったという、記憶が残されているのだと思う。

クラスター3

このクラスターは<部屋の中>のクラスターである。彼女が物思いにふけったり、泣いたりするのは「布団の中」であり、そこが彼女の唯一落ち着ける場所であったことが推察される。また落ち着ける時間帯も深夜家族が寝静まっからの時間に限られ、その時間帯には誰も部屋に来ないし、学校に行けとも言われない、そういった安心感である。当時の彼女の世界は自分の部屋の中と限られており、そのことにも窮屈感を感じていたことが窺える。そして、結局クラスター1にあったような、どこかに逃げたいというような考えにたどり着くということなのだろう。

クラスター4

このクラスターにはEさんとその家族に対する具体的な感情が示されている。両親に対する殺意はあるけれど、自らの手を染めることはない、なにかが起こっていなくなればいい、という憎しみがあるのと同時に、本当に死んでしまったらちょっとは泣くだろうし、愛情がないわけではないという冷静さが存在している。水をかけられたり無理やり家から追い出されたりして、どうして放っておいてくれないのか、学校に行かないだけでどうしてこんなに大騒ぎされなくてはいけないのかという憤りでいっぱいだったのだと思う。

このクラスターの補足として後から「外に出されること自体は昔からあったけど、中学生になってまで追い出されちゃった。と思った。かといって非行少女でもなかったから行く所もないし、イライラしてかばんを踊り場から放り投げて外で暇をつぶしてた。水をかけられて、なにこれ、もしかして虐待?と思った。短気なのはわかっていたけど背中まで蹴られちゃった。」といったように、どうしてここまでされなくてはいけないのかという気持ちも語ってくれた。しかしそういう憤りもあったが、「自分のことで両親がけんかをしていた」「お母さんも病んでいたのだと思う、どうにかしたかったのだろうけど、どうにもならなかった」といったように両親の気持ちにも理解をしないわけではなかったという状態が現れている。したがってこのクラスターをまとめると<家族に対するアンビバレントな感情>を表すクラスターである。

クラスター5

このクラスターでは他のクラスターと違って<対外の世界>を表すクラスターである。学校に行かなくなってから先生や仲良くもないクラスメイトが色々な物を届けにきて、それが何のためにそんなことをするのか、先生は仕事

だから仕方ないけどクラスメートはどうしてなのかわからなかったと語ってくれた。これはBさんの例とも共通するが、先生や友達の形だけの訪問がいかに無意味かということを示唆していると言えよう。またEさんは、教師という仕事が嫌いだったとも語ってくれた。ただ、彼女にはクラスメート以外に親身になってくれたり、純粹に遊びに来てくれる友達がいる、そのことが彼女自身を救っていたようである。食事ができなかつたということに関しても、家の中よりむしろ、友達の家で食べるごはんを指しており、「せっかく作ってくれたのに」という気持ちから出てきたものだという。このように彼女の世界は決して広いとは言えないが、それでも外の世界との結びつきがあった。そのことがやはり、彼女にとってはプラスであり、彼女の中にある冷静な気持ち、前向きな気持ちの源となっていたのではないかと思う。

クラスター6

このクラスターは不登校最中の状態からは少し離れたところにあるように思われる。本人が述べていたように、今までに挙げたそれぞれのエピソードを思い出す中で「補足として」出てきた項目とのことであった。したがって当時考えていたことの中にはないが、おとなに対するイメージについてであったり、精神科やフリースクールに連れて行かれたことや、お父さんにお金で釣られそうになったとか、そういったことが思い出され、このクラスターはくそれぞれのエピソードに伴う補足をを表すクラスターであると言える。

②全体として

Eさんのクラスターはく不登校経験の中心く当時の家庭内の状況く部屋の中く家族に対するアンビバレントな感情く対外の世界くそれぞれのエピソードに伴う補足で構成されていた。インタビュー中に出てきた主なものは「家族」「友達」「死」「教師」「抑圧感」「身体症状」「精神科」である。Eさんの不登校中の世界は他の調査協力者と異なり「家族の中」が全面に現れていた。家庭内がどれほどぐちゃぐちゃであったか、家庭内でも朝のイメージ、昼のイメージ、夜のイメージに分けられ、どの時間帯にどんなことを考えたのか、どのようなことが起こっていたのかが赤裸々に語られた。それらの話からは、心の安らぐ時間や場所は少なかつただろうと、容易に想像できた。この特徴は他の5人には見られないものである。もちろん他の5人にも家族との様々なやり取りがあつたのだろうが、Eさんに関しては特に顕著であつた。また彼女の連想項目の内容が「当時の考え・感情」が多く現れているのが特徴的であつた。「～であつた」という過去形ではなくて「誰か助けて」といったように現在進

行形にも思われるような書き方が印象的である。これは彼女自身の人柄というか女性としての感情の強さ、自由連想をしていくうちに、自分自身も中学2年生にもどって、中学生の彼女が書いたものであるように思う。したがって、他の調査協力者ようになぜ不登校になったかであるとか、不登校を経験したことによって得たことについて思い浮かぶということはなかったのだと考える。また、現在の状態と比較して中学生の当時は大人が汚いものだと思っていたのに対し、今はいいイメージで大人になりたいと思う、という表現で過去から変化したことについて語ってくれた。ただ、彼女は自分自身が大人であるとは思えないし疑わしいと述べているが、これについては同年代の青年たちは多かれ少なかれ抱いている感情であると思われる。

彼女自身の印象としては、おっとりして語り口が柔らかで女らしい人物であった。現在の充実感得点もすべて標準範囲内であり、現在の生活において彼女がそれなりに過ごしているであろうことが窺える。調査者の率直な意見としては「学校というシステムが合わないのだろう」と思わせるような感じだった。彼女は高校に進学しブランクなく大学にも入学しているが結局休学に至っている。休学に至るまではやはり、様々な理由で苦しんだようだが、自分の意思で海外留学をする、仕事をするようになってからは問題なく過ごしているとのことであり、学校に通うということが彼女にとっての負担だったのだろう思われた。

また派遣社員として働いている現在も、Eさんは家族と同居しているとのことであった。このことから、当時の家庭状況は悲惨なものであっても、結果として、自分で働けるようになった途端に出て行きたいと思うような家庭ではなくなったということが分かる。「友達」についてはBさんと同様に、「先生に言われてプリントだけ持ってくる友だち」と「本当の意味でそばにいてくれる友達」の2種類に分かれていたことが分かる。彼女たちにとって「学校からの差し金」という友人がいかに意味のないものかということが分かる。しかし、同じ不登校児童生徒がみな同じように「自分をわかってくれる友達」がいるとは限らないので、その点でやはり彼女は友達関係において恵まれていたと感じるし、それは現在の彼女自身から窺えることができるように、彼女自身が自分のことを大切にしてくれる友達を作れる能力があるのだと感じさせられる。

(6) Fくんの事例

Fくんは現在25歳の社会人である。不登校だったのは高校1年の頃で、大検予備校を経て、大学・大学院へと進学した。連想項目は25項目。うちプラスイメージの項目が18個、マイナスイメージが6個、どちらでもないが1個であった。図6はFくんの分析結果である。

重要項目の3分の1にあたる8項目を挙げると以下のようになった。

- 1 : (-) 両親には大変悪いことをしたと思うけど体力的にも精神的にもつらくて乗り越えることができなかつたという気持ち
- 2 : (-) 大学生のときは高校をやめたことをあまり気にしてなかつたけど就職活動、就職を通してから高校卒業しておけばよかったなど少し後悔する気持ちが初めて出てきた
- 3 : (+) 学校に行かなかつたとき、中学のときの担任の先生が相談に家まで来てくれた。「学校に行け」ともそういう話はされず、普通に話をしていたただけでしたが、心が落ち着いた。そしてその担任の先生から「学校そんなに行きたくないならやめるか」と言われ、今までいかないと思つてたけどやめてもいいという選択肢ができて少し先が見えた
- 4 : (+) 壁にぶつかつたときどのように乗り越えるかこれからの課題でもあると思う
- 5 : (+) 高校をやめた結果いろいろな人と出会えたのでやっぱりやめてよかったとも思う
- 6 : (+) 友達の家泊まりに行つて遅くまで話しをしながら遊んでたこと
- 7 : (+) 彼女と遊んだこと
- 8 : (+) 高校をやめたときはとてもすっきりした気分だつた

重要項目8項目中の6項目がプラスのイメージであり、全体的にもプラスの項目が多かつた。特徴としては不登校のその当時のことではなく、辞めてから出会つたことや考えたことが中心になっていることである。このことから、彼にとっての不登校経験はその体験を踏まえてどうなつたかということを中心に構成されていると考えられる。また、項目全体においてもプラスの項目が多かつたことから、やはり彼にとっては結果としてプラスになっていることが窺えるものである。

<クラスター 1 >

- 1 : (－) 両親には大変悪いことをしたと思うけど体力的にも精神的にもつらくて乗り越えることができなかったという気持ち
- 15 : (+) :死にたいと思ったこともあったけどどんな形でも生きていたいと思った
- 2 : (－) 大学生のときは高校をやめたことをあまり気にしてなかったけど就職活動，就職を通してから高校卒業しておけばよかったなど少し後悔する気持ちが初めて出てきた
- 13 : (+) 学校に行かずにずっと小説を読んでいたこと
- 4 : (+) 壁にぶつかったときどのように乗り越えるかこれからの課題でもあると思う

<クラスター 2 >

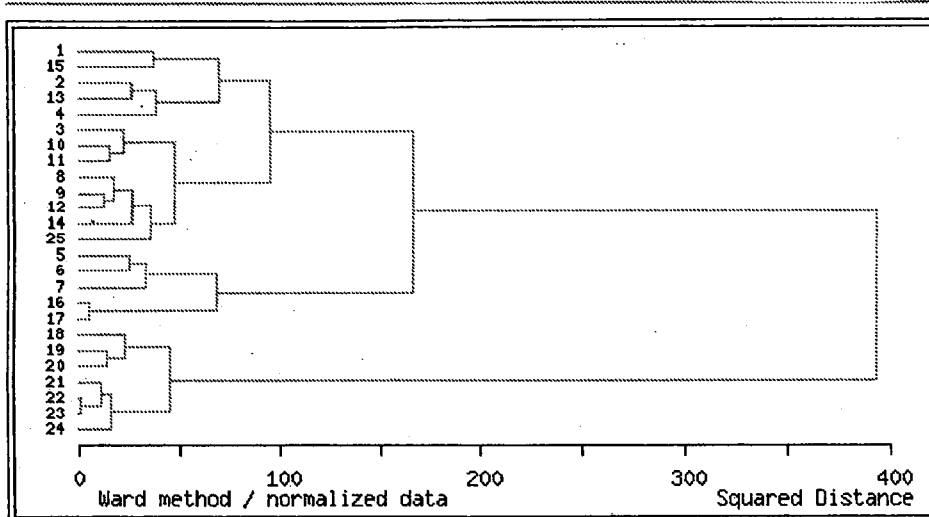
- 3 : (+) 学校に行かなかったとき，中学のときの担任の先生が相談に家まで来てくれた。「学校に行け」ともそういう話はされず，普通に話をしていただけでしたが，心が落ち着いた。そしてその担任の先生から「学校そんなに行きたくないならやめるか」と言われ，今までいかないと思ってたけどやめてもいいという選択肢ができて少し先が見えた
- 10 : (+) 大検の存在を知ってこの方法なら大学にいけると思った
- 11 : (+) ボーっと空を眺めてたこと

<クラスター 3 >

- 8 : (+) 高校をやめたときはとてもすっきりした気分だった
- 9 : (+) 大学に合格したとき自分の選択は正しかったとおもった。
- 12 : (+) 高校に行っていないときやる気がなかったこと，やめてからは自分のしたいことができやる気が出てきたこと
- 14 : (+) 予備校が自由だったので自分の出る時間だけ出ればよかったので自由な時間が増えた
- 25 : (－) 大検の予備校に通っているとき先のことを考えると不安になるときがあった。

<クラスター 4 >

- 5 : (+) 高校をやめた結果いろいろな人と出会えたのでやっぱりやめてよかったとも思う
- 6 : (+) 友達の家泊まりに行き遅くまで話しをしながら遊んでたこと
- 7 : (+) 彼女と遊んだこと



< クラスタ 5 >

16: (+) 友達と卓球してたこと

17: (+) 先生と将棋してたこと

< クラスタ 6 >

18: (-) 周りの人の視線が、とても気になった

19: (-) 明日は行こうと思っているうちに夜になって明日が来るのが嫌なこと

20: (-) 高校に行っている時はとにかくしんどかった。ほとんど休まず、寝ずに勉強をしていたから。もっと休憩するべきだった。

< クラスタ 7 >

21: (+) 高校に行っていないときは8:30まで寝てたこと

22: (+) 朝起きてからテレビのアニメを見てたこと

23: (+) ワイドショートか見たりしていた。

24: (0) 精神科に行ったこと

図 6 F さんの自由連想項目とそのクラスタ分析結果

* 各項目に付した番号は本人による重要度順位である。

* 各項目で付した (+) (-) (0) は本人によるその項目の感情的意味合いである。

1. 本人によるクラスターの解釈

①各クラスターについて

クラスター1

「共通するのは高校辞める前の状態。」とまとめてくれた。具体的に「辞めたのは夏で、3ヶ月くらい休んで留年になったのでその時、中学の先生が高校辞めてもいいんじゃないかって話になって、その時に大検のこと知って。その時までは辞めるっていうことを全然考えて無かったので。辞めてもいいなら辞めようかなって。で、勢いで。」「親にはかなり反対された。取りあえず辞めてからどうするか考えてから辞めろって言われて、辞めてから大検取って大学に行くってことで辞めた。」最初から大検を受けるつもりだったのかという問いに対しては「最初から大検をとるって決めていたわけではなくて単位制か大検か悩んで、たまたま大検の説明会の話とか先生が相性よかったの。」と答えてくれた。また、「その時は親に悪いという気持ちはなかったけどやっぱり年を重ねるにつれて、親は悩んだんだろうなあって。そういう親に対する悪いなって気持ちはあるんですけど、その時は、そういう状態だったから親にうまく伝える力がなかった。当時は体力的にも精神的にもどうしていいかわからなかったの。今は悪いと思うけど当時の自分ではどうしようもなかった。」と省みた。個別の項目については「15番は行ってない時に思っていた事。学校に行っていなかったときに、どうしていいのかわからなかったんで死んだ方が楽なんかなって、そういう事思ったり、でも自殺とかはできひんなって。一回か二回真剣に考える時があって、自殺するって。一回はやってみただけど自分にはできなくてやっぱり死ぬのは怖いから、現実的には無理なんだけど。じゃあこれから先どうしようかなって。なら高校辞めようってそのあたりで先生が。」と、死について語ってくれた。「13番は本を読むのは好きだったので。あんまり寝てなかったんで勉強してちょっと本読んだりして睡眠時間がほとんどなかった。高校行ってない時ほとんど外に出てなくて、本を読むしかすることがなかったんで、高校行って大検決めるまではずっと本読んでた。高校までは小説とか読んだことなかったんですけど、高一の時、読書感想文で読んだ本が面白くて、司馬遼太郎とかほとんど読みました。通りあえず本を朝から晩まで一日一冊くらい。」と読書について加えた。「2番は大学の時は高校辞めても大学行けるって自分の中で頑張ったっていうのがあったんですけど、大学時代は授業聞くだけなんで特に高校辞めて大検行ったことなんて完全に忘れていた。去年就活してやっぱり学歴書く時に高校中退って書かなくちゃいけなくて。自分としては高校辞めたことに関してそんなにどう答えていいかわからなかったですね。その当時なんで辞めたかとかも忘れていて。就職活動のときにもう一回なんか考

え直したりして、辞めたことがマイナスにとられるってのが、それやったら行っとけばよかったなって気持ちが出てきた。もともと口がうまくないんで、面接の時嘘ついたりすることもできなくて本当のこといってたら、なかなかうまく行かないというか。最終的にはこう言ったらいけるなってマニュアルを見つけてそこまで気にしなくてもいけるようになった。」と就職の際に苦労したことについて語り、「時代は結構ばらばらだけど状態と感情が出ている」とまとめてくれた。

クラスター 2

「3番は当時周りが、親もみんな学校行けっていうけれど、逆に、行けっていわれたら行けない。その時に中学の担任の先生が来てくれて相談にのってくれた。最終的にはそれなら辞めてみたらって、そのひとことで辞めようと思ったんですけど。」と述べ、「人生を変えるきっかけを与えてくれた先生は重要」であるとした。「10番は辞めるとしても辞めて働くか、高校行くか。働くとしたら中卒で働くことになるので、そのときの自分に何ができるかという何もできなかったんで。やっぱり大学は行ったほうがいいなと思った。」と説明をしてくれ「最後の項目は予備校の図書室の風景で、どうなるのかなって不安みたいな気持ちだった。」「共通するのは当時の状況。高校を辞めてから大検を知って、予備校に入ったその流れ。」とまとめてくれた。

クラスター 3

「8番はそれまで行きたくないけど行かないといけないって葛藤だったんで。高校辞めてからはもう行かなくていいんだって気持ちですっきり。」と語ってくれた。「9番はそのとき今から思うとノイローゼというかひどい状態だった。大検行ってからは、そのままストレートにいったんで。やっぱり自分の選択は間違ってたって。」と省みた。「12番は高校行ってた時は高校の勉強しなくちゃだめだった。大検以降は何を勉強するかって自分で決めなきゃだめなんで、受身的な勉強だったのが自分で積極的に勉強していかないといけない状況になってやる気が出てきた。」「25番は予備校に行っても大学に行けるのか就職できるのかわからなかった。働くってイメージもつかめなかった。そう考えると漠然とした不安があった。もし高校さえ行ってたら、大学行かなくても高校卒業になるけど、大検失敗したら中卒のまま。」「まとまりをみると高校を辞めて大検予備校に通ってたときのこと。最終的にはその選択は正しかったんだというまとめだ。」と語ってくれた。時代的にはぎゅっと凝縮されていて辞めてから受かるまでの気持ちであると解釈してくれた。

クラスター 4

友達について「高校だったら同い年の子としか知り合うことないけど、予備校は年の離れた人が多かったの。今まで出会うことがなかったような人と出会えたりして。それはそれでよかったかなと。」「それまで、友達の家遊びに行ったりとかなかったんで。」と良かった点について話をしてくれた。

「彼女もその時代の人。」「流線的に全部出会いというか、今までの出会いで高校辞めてからじゃないと出会えなかった、これはこれで辞めてよかったと思える部分。」と説明してくれた。友達とは「辞めたときに会ったんで不安定なときを一緒に過ごした」「僕が17歳くらいのときに20から23くらいの友達だったのでお兄ちゃん、お姉ちゃん的存在で。普通に高校通ってるのとは全然違う出会い。」と語ってくれた。

クラスター 5

このクラスターについては簡潔に「大検の予備校のときにやっていたこと。おんなじ時期。楽しかったこと」とまとめた。

クラスター 6

「これは全部高校行ってる時の状態。」と共通点を挙げた上で「周りの人の視線っていうのは学校に行っていないと昼間とか、何やってるねん。みたいな。けっこう近所のおばちゃんとかいつも見てるんで。見られたりするとすごい嫌やなって言うのがあったんで。親も同じ。」と振り返り、「たぶんそんなに気にしなくてもよかったんですけどその当時は悪いことしてるとって気持ち、行かないといけないのに行ってない。行かないっていうのが自分の中で悪いっていうのもあったんで。」と罪悪感について触れた。ほとんど休まずっていうのは、学校行かなくなる前に高校1年の時なんですけど。そのとき結構無理して勉強してたんで、やっぱりやりすぎは良くないなど。進学校だったので全然わからなくて、スピードも速かったし追いつこうと思ってやってたんですけど、土日も休まずで、体力的についていけなかったんで。そこまで勉強しなくてもって。」と振り返った。

クラスター 7

「21番はそんなにむちゃくちゃ遅くまで寝てなかったんですけど、親が仕事に行くときに言われるんで、親が仕事に行くまで、それが8時半だったんでそれまで寝て50分からアニメとか見て。それ以外、特にすることもなかったん

で、テレビ見たりして、昼もテレビみたり。何を見るわけでもないんですけどワイドショーとか。」と不登校当時の家庭での状況について話してくれた。

全体の共通点としては「高校に行かなくなった直後くらいですね。そのときやってたこと。生活ですね。」また、精神科について「精神科はなんかそういうリハビリじゃないんですけど、よく分からないとこ連れて行かれて、心理療法じゃないんですけど、いまの自分がどう思ってるのかとか話したりと、結局なんだったかよく分からないんですけど。」「それもなんで終わったのか。何回か行ったらまあいいやろみたいになって。特に何が言いたかったのか。そんなおかしかったわけじゃなく、ただ行きたくなかっただけなんで。」と振り返り、「これのまとめりは、高校行ってない時、大検はいる前の不登校の時期の状態」とまとめてくれた。

クラスター間の比較

クラスター1とクラスター2の関係については、「両親に対して悪いことしたなという気持ちと高校卒業しておけばよかったという気持ちと、親が言った通りやっておけばよかったという気持ちで共通している。本を読んでいたのを読まずに学校いけよという意味で、つながっているのかもしれないと思う。」と説明した。クラスター1とクラスター3については、「クラスター3は大学に受かったときの気持ち、クラスター1は最近の気持ち。これとこれはどっちかっていうと反対の気持ち。そのときはよかったとっていたけど、今は、ちょっと後悔の気持ちも入ってきたのでどっちかという今と昔の気持ちであり、気持ちの比較。当時と今の気持ちの流れという意味で関連がある」と語ってくれた。クラスター1とクラスター4については、「友達もできて楽しいなって、高校時代は絶望的な気持ちだったんで。辞めてからこういう方法もあるんだなって思うと、楽しいなって。ここで死を選ばなくてよかった。楽しいこともあるんだなって。死ぬより生きるほうがまだましっていったけどその判断は間違ってた。」と語ってくれた。また、クラスター1とクラスター6については、クラスター1の13番とクラスター6の18番が多少関係があると述べた。「本ばっか読んでたのは周りとか両親とかが気になっていたから。同様に4番と20番にも関連があって、壁にぶつかった時にやり方が悪かったかなっていうのがあったので、これから自分やったらどういう性格で、どういうことでつまずいたりして、どうやれば乗り越え、一番つまずいたときにどうやっていくのかな、という意味で関係がある。そのときは乗り越えられなかったんですけど、そういうのがあったから今度はそうならないようにどうすればいいのか考えるという意味でちょっと対応がある。同じように19番は15番と。朝になるのが嫌だ

ったのでそのまま目が覚めなければいいのになっていうので関連がある。当時のことに関して今思っていることとか。当時と今で対応した感じ。」と話してくれた。

クラスター2とクラスター3は、両方とも高校辞めてから大検予備校に通い、大学行くまでの気持ちのながれだということで、時代も近く、大検、高校辞めて大学にいこうってきっかけを得た頃のこと、とのことであった。クラスター2とクラスター5は、多くが気分転換になった項目で、11番だけが不安な気持ちがあって楽しくない項目だと話してくれた。クラスター3とクラスター4は大検予備校時代の同時期のこと。ほとんどが楽しいプラスの気持ちだが、25番だけ不安な気持ちだと話してくれた。クラスター3とクラスター5は大検予備校時代の楽しかったことでまとめられている。クラスター3とクラスター6は、クラスター6の周りの世界が気になったところから、クラスター3の勉強面などで苦しんだ時期へと時間が流れているとのことだった。時間の流れとしては、クラスター6とクラスター3に挟まれたクラスター4とクラスター5も大検予備校時代の楽しかった事としてまとめられていた。最後にクラスター6とクラスター7について、どちらも不登校時代に共通しているとのこと、周りの視線をととても気にしていたと語ってくれた。

②全体の感想

Fくんは今回自分の不登校のときのことを振り返ったことについて「ちょうど、なんで辞めたんかなって考えてたんです。完全に忘れていたのでいきっかけになりました。」と言及した。クラスターについては「まとまっていると思いました。最後のところは微妙だった。」、また「最近の感情は今までのものとちょっと違います。親のこととかは今まで考えてことがなかったし、就職活動を通して変わってきました。」と語ってくれた。

2. 調査者による総合的解釈

①各クラスターについて

クラスター1

最初のクラスターで「両親」・「先生」・「死」・「就職」・「不登校を経て得たこと」といった重要と思われる項目が多数含まれている。高校退学についてはかなり反対をされたということであり、内容の良し悪しは別にして、家族とのやりとりが多くあったのだと窺える。そして妥協策としての「やめてからどうするのか決めてから」と言う結論に達したのだと思う。本人は当時、自分のことで精一杯で他の事を考える余裕がなかったと振り返っているが、この時期に家

族のアドバイスがあったからこそ、順調に進んでいったのではないかと思う。また、彼にとって決定的なきっかけとなった「辞めたら？」という言葉を出したのは、高校の先生ではなく、中学の先生であったとのことだった。どのような環境であったのかは分からないが、中学の恩師と連絡を取り続けていられたり、今回のインタビューも予備校の先生からの紹介であるので、彼の教師との「関係作りの能力」は意外に高いのではないかと思った。また、死について、彼の場合は実際に何回かは実践したようだったが「怖くて」やめたと述べている。こんなに怖い思いをするくらいなら生きて学校を辞める方がまし、だと結論付けたようで、消極的な死への対策法ではあるがこの判断が後に正しかったのが分かることになる。しかし、今までの例からも分かるように、「死」に対する考えというのは、内容はどうであれ共通するものである。就職について、これはDくんとも共通することであるが、派遣社員ではなく正社員で働こうとなると、どうしても過去の不登校経験はついて回ってくるようである。不登校をしたことがあるだけで落とされることもあるし、かといって「不登校に至った経緯」を話すだけでも面接には通らないとのことである。DくんとFくんに共通して「不登校をしたことによって自分が何を得て何を失ったか」ということについて説明ができて初めて採用に至ったようである。ただ、Fくんはここで不登校をしたことを後悔している点がDくんと異なっている。高校中退後も大学・大学院と順調に進んできた彼は、いきなり過去に直面化させられ、その結果、後悔するに至ったのかもしれない。これに対してDくんは常に「不登校経験」について考え続けていたので、混乱が少なく「不登校をしていた自分」のアイデンティティを持って就職試験を通り越したのだと解釈する。以上のことを含めてこのクラスターを<ぶつかった壁>についてのクラスターとする。

クラスター 2

このクラスターは<学校に行かないという選択>に関するクラスターである。中学校の先生によって「高校中退」という選択肢を得て大検を受けることに決めるまで、中卒で終わることによって人生の選択肢が減るという恐怖との戦いであるように感じる。これに関してもDくんと共通点である。

クラスター 3

このクラスターは<中退から大学入学までの勉強面での変化>を表すクラスターである。本人が述べる通り、高校の授業のレベルの高さとスピードの速さは身体を壊すほどであり、与えられたものをこなすだけで必死だった中で、予備校に入り自分自身で勉強の計画をデザインできるようになり落ち着きを取

り戻した様子が現れている。それと同時に、ルールから外れたことによる不安も垣間見ることができるが、項目全体のイメージから結果としてよかったのだということである。

このような勉強面での要因を大きく出したのはFくんだけであり、彼特有のものである。話を聞いていると彼の入学した高校は地域でもトップクラスの公立高校だったとのことで、もともとの彼の知的レベルの高さが窺える。

クラスター4

このクラスターは<中退後の友人関係>に関するクラスターである。Fくんによると、自分はもともと口下手で、人付き合いは苦手としていたところが、予備校に行くことで年の離れた友人ができ、そのことが忘れられない経験となったということである。ここでも、「本当に自分のそばにいてくれる友人」の存在があり、高校を辞めてよかったと思える一因となっている。

クラスター5

これもクラスター4と同様、高校を辞めたからこそその友人関係の中でできたことである。だが、卓球をした、将棋をしたというたった、それだけのことがいい思い出として長期に渡り心に残っていくということである。このクラスターは<印象的に残っている遊び>についてのクラスターである。

クラスター6

このクラスターは本人の分析どおり<不登校時代の精神的苦痛>であると考えられる。高校の授業についていけないまま学校にも行けなくなっている状態で、休みたい気持ちと、学校に行かなくてはならないという気持ちの葛藤を思わせるクラスターである。当時の彼にとっては「学校にいかないこと」は「悪いこと」であり、その罪悪感からも周りの目が気になるという結果になったのだと思う。

クラスター7

このクラスターはクラスター6と同様<不登校時代の生活>に関するクラスターである。クラスター6でもあったように学校に行かないことに罪悪感を感じるがゆえに、人の目を気にし、結果、外には出られなくなってしまった。両親が仕事に出かけて文句を言われなくなるまでベッドから出ず、居なくなつてから起きだして、やることもないのでテレビを見るということの繰り返しである。しかし、Eさんの事例と比較して彼にとって誰も居ない昼間の時間帯は

それなりに貴重なものだったのではないかと推察する。また、精神科について、ただ学校に行きたくないだけなのに連れて行かれたという感情が残っているとのことだった。これもEさんに共通する面がある。通院は結局のところ、なし崩し的に終了しているようであり、当時の不登校に対する対応についても考えさせられる。

②全体として

彼の不登校経験はくぶつかった壁について><学校に行かないという選択><中退から大学入学までの勉強面での変化><中退から大学入学までの勉強面での変化><中退後の友人関係><印象的に残っている遊び><不登校時代の精神的苦痛><不登校時代の生活>の7つの側面で成り立っている。彼に特有である項目はやはり「勉強面」が挙げられているところである。人間関係も不登校の要因として挙げられているが勉強についていけないことで睡眠時間を削り、体調を崩すまで頑張った結果、糸が切れたように学校を休みだしたというようなパターンである。中退したのも3か月分休めるだけ休みきって、留年が決定したときにそれなら、という勢いで中退を決めたと述べており他の5人と様子が違うところである。

また、高校を辞めてからの人生設計がしっかりしている点もFくんの特徴として挙げられる。Dくん同様、大学まで年齢的なブランクが全くなく、さらに大学院まで進学しており就職試験にぶつかるまで「不登校していたこと」を完全に忘れてしまえるくらい順調にいき、結果として現在は正社員である。

また、不登校中の「罪悪感」が現れているのも彼の特徴である。他の5人が同じようにテレビを見たり、本を読んだり買い物に出かけたり、わりと「堂々」と不登校をしているのに対し、彼だけが「悪いこと」だとしていると述べていた。インタビュー中の様子からも、彼の生真面目さ、頭のよさが出ていたが、やはりこの生真面目さが、勉強面の無理や罪悪感につながっていたのではないかと推察する。

最後に、彼に関しては「不登校」という言葉があまり聞かれず、「学校に行っていなかったときに」という表現が多かったのも特徴である。精神科に行ったところで述べられているが、あくまで彼にとっては「学校に行っていなかった」時期にすぎず、あまり「不登校」という言葉には直結しないように思われた。したがって「中退」や「予備校時代」という事実を示す言葉はあっても「不登校時代」という言葉は出てこなかったのだと解釈する。

また、「家族関係」「親友の存在」「死について」「教師の存在について」「就労について」といった項目は他の5人と共通するものであった。家族関係について

の中身が多く語られることはなかったが、高校中退を反対されたこと、不登校中の家庭での居心地の悪さについて挙げられていたことから、当時はそれなりに大変だったであろうことは推察される。しかし、結果として現在、両親に悪いことをした、と思いやる気持ちが芽生えていることから家族関係が悪かったと結論することはできない。友達についても、結果として彼は「本当の友達」を得たことになり、これは本人にとっての成功体験として記憶に残り、その後の自信につながっているのではないかと思う。死についても、実際ナイフをもって試みたにもかかわらず、死ぬくらいなら学校を辞めたほうがましだという気づきを得て、「死」について向き合ったのだと感じられる。教師について、通りあえず様子を見に来て登校を促すような教師が他の例に挙げられているがそれとは異なり、親身になって一緒に考えてくれる教師がいたことも彼の財産であろう。しかし中退を薦めることができたのは、当時Fくんが在籍していた高校の教師ではなく、中学の教師であった。先にも述べたが彼は教師や目上の人に可愛がられるような性格、雰囲気を持ち主でありこのことも彼自身の能力であると思う。また、就労に関してはDくんとの共通点が多くあるがやはり、「正社員」の面接では多くの難問があるのだと思わされた。インタビューの最後に彼は自分の不登校経験について「肯定的」であると答えたが、付け加えとして「あくまで僕にとって」であり、就職活動とかの面を考えると損する場合もあるので、後の後悔を考えると不登校をしないですむならしないほうがいと述べていた。このことから就労に伴う苦労が伝わってくるが、FくんとDくんの事例を通して「不登校という経験から得たこと」について、自分自身の考察を深めることが重要であることが分かる。

【全体的考察】

(1) 共通するキーワード

それぞれの調査協力者とのインタビューの中で、ひとりひとりの「不登校の認知」は全く違うものであり、それぞれに苦労したこと、悩んだこと、得たことがあるということが読み取れた。しかしその中でもその内容こそ違うが、例えば家族のことであったり、友達のことであったり高い頻度で語られた項目があった。以下にその共通点について考察する。

① 家族・家庭について

家庭については6人の調査協力者全員が想起項目ないしインタビュー中に思いを語った項目である。Aくんに関しては教師に学校で起こった出来事を話し、直接の不登校の引き金を作った母について、また、不登校中はその事実を隠し、休学が決定するまで話せなかった父について述べていた。Bさんは、不登校中はずっと家にいたということ、話し相手は母だけだったということについて、Cくんに関しては両親が旅行費用を出してくれたこと、泣いた父の映像が語られている。Dくんは、直接項目に家族という単語はなかったものの、ずっと学費を出してもらった借りがあると述べ、Eさんは、その不登校中のイメージのほとんどが家族家庭の状況であり、Fくんは親に迷惑をかけたと振り返っている。6人それぞれが持つ、家族に対するイメージはばらばらで、よきアドバイザーであった両親もいれば憎しみの対象としての親もいた。しかし、親のせいでこうなったとか、今でも親を憎んでいるなどの言葉が出ることはなく、ほとんどのケースにおいて、迷惑をかけたと思う、両親は両親で悩み苦しんだと思う、悪いことをしたなどの、言葉で語られていた。したがって、当時の状況はどうであれ、そのことが10年後の状況に影響しているとは考えにくく、家族が協力的・非協力的かどうかではなく、彼らと「やりとり」を行ったかどうかが大切であると考えられる。つまりその当時にどのような関わり方でもよいから親が子どもと向き合っていたことが、当時の両親の気持ちを気遣うことができるような成長を彼らにもたらしたのではないだろうか。学校に行かないことを決断し、実際家にずっといるようになると、その生活の中心が学校ではなく家庭になってしまう。そうでなくても中学生から高校生年代は家族なしでは生活が成り立たないし考えられない時期である。だからこそ、どんなにかわり方でもよいから家族は自分の子どもや兄弟と向き合わなくてはならないのではないかと考えさせられた。

② 友達について

友達についても6人それぞれからキーワードとして語られたものである。その内容としてAさんはYくんという不登校の原因となった友達と自分自身の友達のつきあい方について、Bさんは友達が欲しかったという願望と文通という方法で自分を理解してくれる友達を得たこと、学校の友達が嫌だったことなど、Cくんは中学時代に初めて友達とは何かと向き合ったこと、そして高校に入ってからつまづいたこととして、Dくんは、友達について直接には語らなかったが、友達とうまくつきあう能力は必要であると述べ、Eさんは学校から来る友達が嫌だったこと、それとは別に本当に遊びに来てくれた友達が救いになったと語り、Fくんは大検の予備校に入りそれまで泊まりがけで遊ぶような友達はいなかったのに初めて本当に楽しい時間を共有し、一緒に悩める友達ができたと語った。

以上のことから、友達については3種類に分かれるということが分かった。一つ目は不登校中であってもそれを踏まえてそばにいてくれる友達、また、一緒に悩み苦しんでくれる友達、いわゆる親友である。二つ目はCくんやDくんのように、友達とは何だろうと考え、これからの人生においてうまく関わって行かなくてはならないという課題としての人間関係。三つ目はBさんEさんに見られたように学校からプリントを持ってくる友達であるが、この友達はあまり良い印象を持たれることはないようである。また、森田(2003)の「学校や職場でよい出会いや経験をしたり信頼できる人との出会いが少ないグループほど不登校が現在の自分にマイナスの影響を与えているという評価を下した」という調査結果に合わせみると、今回の調査協力者は、少なくともインタビューを実施した時点では良い友人関係を築けており(表1参照)、そのことが成功体験となって現在の自信につながっているようにも思う。25歳前後という年齢は就労など、自身の人生の道を決定して行くにつれて、自分の成功体験、失敗経験を含めて、自分の友達とのつきあい方のスタンスが決まってくる時期でもある。もちろん、今でも友達関係は苦手だと結論づけている例もあるが、それはそういうものだとして受け入れて、できる範囲でつきあっていこうという様子が窺える。

重要なことは、例えば人間関係が不登校の原因であったとしても、そこで諦めてしまわないことだと思う。学校の人間関係は学校だけのことと割り切って、他のフィールドで探してみる努力が大切だと思う。Bさんの例にもあるように現在で言う例え「メール友達」のような「文通相手」であっても、自分の事を話せるという経験はプラスになっている。友達を作るのは苦手だと家にこもってしまうのではなく、大検を受験する、単位を取るなどのように、外に出れば必ずと出会いはついてくるものであり、その点について、この6人は良か

ったのではないかと思う。「友達」というのも「家族」と同様、思春期の子どもたちが抱える大きな課題であり、人間関係の悩みなしでは通り過ぎることはできない。しかし結論から言えば、例え中学時代、高校時代にうまく人間関係が築けなくても、友達との付き合い方がわからなくても、その後の努力しだいでいくらかでも取り返しがつくようになっている。投げ出すことなく外の世界に目を向けていれば乗り越えられる壁であるということがインタビューを通して実感したことである。

③ 教師について

教師についても、6人中5人の協力者がそれぞれの記憶の中に印象に残った人物として語っていた。Aくんは心配してくれた、お世話になった先生について、Bさんは先生がわざわざ家に来たり、電話をかけてくるのが苦痛だと言い、Dくんは就職の際にアドバイスをくれたこと、Eさんは先生という職業自体が嫌いだった、家に来るのも嫌だったと語り、Fくんは中退という選択肢を与えてくれたとし、それぞれが「先生」について語っている。教師についても友達と同様、2種類に分かれ、1つは彼らに適切なアドバイスをくれた教師として、もう1つは悪いイメージの大人の代表として語られていたように思われる。例えば不登校中に家庭訪問に来る教師について、家庭訪問そのものは悪いわけではないが、その時に生徒に「仕事だから来ている」と思われる教師とそうでない教師がいるということである。「仕事だから来ている」と評価しているのはBさんEさんと女性に共通している。これが男女差かどうかは分からないが少なくとも今回の結果としては女性にそのような傾向が見られた。これに対してCくん以外の男性においては良きアドバイザーとして評価されていた。2名の男性協力者による教師に関するエピソードに共通する点は、それぞれの先生が「学校を辞める事自体は構わないが、中卒と高卒と大卒ではつける職業に違いがある」など具体的に辞めたらどんなデメリットがあるのか、辞めた後にどうするのかということについて話をしていることである。この事に関しては後述することになるが、今回の協力者においては男性の方が女性よりも「この先どうなるのか」という不安の強さが感じられ、高校を辞めてからのブランクも少なかったことから、あくまで社会復帰を念頭に中退の道を選んでいるように思われた。今は学校には行けないことで苦しんでいるが、いつかは社会に出ると漠然とでも思っている子ども達に対して、具体的にアドバイスを与えることができる先生がいるということで、彼らの進路選択の姿勢が変わってくるのだということが窺える結果であり、ただ単に「学校においで」と促したり、「学校になんて行かなくてもいい」といったような意見では子どもたちの心は動かされない

ということである。

④ 死について

死についてもほとんどの調査協力者が「深く考えた」と答えている。例えばAくんは、死にたいという言葉ではなかったが、高校を辞める直前はすさんでいた。護身用に何か持っていないかとは思っていた、また、同じ高校で刺殺事件があり、自分も同じことをしてしまうかもしれないというどちらかというところ「人を殺してしまうかもしれない」という恐怖について語っていた。Cくんは「死ね死ね」という幻聴があったこと、Eさんは自分も死にたいという気持ちと、まだ幸せじゃないから死ねないという気持ち、同様に親も死んで欲しいけど殺して殺人犯になるのは嫌だという気持ちを語り、Fくんは学校に行くのが嫌で死にたいと思うが、実際に実行に移すときに恐怖を感じ、死ぬくらいなら辞めた方が簡単だという結論に至っている。

彼らの話を聞いていて「死にたい」気持ちと同様に「殺したい」という気持ちがあるのだということに驚かされた。それだけそれぞれの心の中でせっぱ詰まった、この世界からいなくなってしまうという気持ちがあるということが推測される。一般的に、思春期の子どもが多くが「死」について一度は考えることであろう。しかし学校に行かず家にいる彼らは他の子どもたちに比べて、一人で考える時間が多く、その居場所のなさや、将来への不安といったものが常に心を支配しており、より「死」を身近に考える機会が多いのかもしれない。しかし今回の調査協力者においては、もし実行したらどうなるかということについて冷静に考えられる能力があったのだと言うことでもあろう。昨今の事件の中でも、同じような事を考えた結果、親や兄弟を殺してしまったり、実際に犯罪を犯してしまっている子ども達がいる。やはりそのような子ども達は、実行したらその先どうなるのかという、たったそれだけのことが考えられずに判断を誤ってしまっているのではないかと思う。したがって、調査協力者が持っていた殺意や自殺の願望も決して中途半端なものではなく、実行可能であったとも十分考えられる。しかし、本当に親が死んだらどうなるか、自分が殺したらどうなるかと考えること、死ぬくらいなら生きた方がましだと判断できたという意味で冷静さがある。そしてやはりこの冷静さの背景には、どんな形であっても上述したように家族や友達、教師の関わりがあったからではないかと思う。

⑤ 定時制高校・大検予備校について

協力者6人中5人が定時制高校や大検予備校のどちらかに通っていた。これら

の施設に対する彼らの共通した意見は、自分のペースで勉強ができることや毎日通わなくてもよいこと、単位制なので大学と同様で必要な単位だけ取ればよいことというメリットであった。Fくんのように大検予備校で自分と同じような体験や、自分とは全く違う環境のクラスメートや先輩にめぐり合うことで、これまでうまくいかなかった友人関係に関する成功体験を得られることも、メリットとして挙げられよう。しかし同時に、学校そのものに気楽さはあっても、その手の学校自体の特質でもある人間関係の希薄さから普通の高校のような友人関係を築きにくいというデメリットも指摘されている(Cくん)。もともと人間関係が苦手な子ども達にとってはそれも良い面ではあるが、同様にデメリットでもある。それでも高校を中退した後に、学業を諦めることなく続けていくことは社会とつながり続けることになる。仮に良い人間関係が築けなくても、Cくんはその後の大学で楽しさを見出しているように段々と状況は変わっていくようである。言うまでもなく、大切なことは外に出ることを諦めないことである。

⑥ 就労について

調査協力者の6人中3人が現在なんらかの職業についていた。3人中2人は派遣社員で、ひとりには正社員である。未就労のうち2人は現在学生であるが、看護学校だったり、すでに内定をもらっていたりと就職に直結した状態であり、インタビュー実施時に就労について見通しがなかったのは1人だけだった。

森田(2003)によると、不登校から5年後の人々に共通することとして、人とのつながりや職場や学校という場へいったんつながりを持てば、その人はその後の生活でも社会との接点を保ち、社会的な場での自分の位置を持ち、社会的な場での自分なりの位置を持ち続けていく方向へ向かう「正の連鎖」が起こる確率が極めて大きいとし、仕事であれ、学校であれ、どこかに所属するという直前の状況が次の状況に連鎖的に関連していく傾向があるということである。まさに今回の6人には同じ事が言え、6人とも共通して不登校の後で、何らかの社会的つながりを求めており、そのことが次のステップへとつながっていると思われる。一般的に、これまで不登校の背後には「進路形成」の問題が見落とされており。中学校で不登校に陥ったことが進学だけではなく、その後の職業生活に不利益をもたらすことが危惧され、大検などの進路保障が図られてきた。中学時代に抱く児童生徒や保護者の不安感や危惧感はむしろ不登校の子ども達が中学を卒業した後に直面する現実であると言われている。今回の6人に関してもDくんFくんは就職活動において不登校であった過去が本人達にとってマイナスの面で直面化させられる状態となった。しかしながら彼らの

場合は就職活動を諦めることなく、なぜ自分は不登校になったのか、不登校時代に何を考えていたのか、不登校を経験したことによって何を学び、何を得たのかについて自分なりに分析し、それを企業の経営陣などに説明したことによって、不登校経験をマイナスにすることなく、就職に至っていた。しかしそれぞれの不登校の経験が本当の意味で足かせになるのは、この就業という点であり、Dくんが述べていたように不登校をしていたことで協調性がないとか、企業という組織でやっていけるのかとか、縦社会でうまくやれるのかという点などで、マイナスのイメージをつけられてしまうという可能性も否定できないであろう。ただし、この傾向は正社員の場合と派遣社員の場合とではまた少し違うようである。例えばEさんは大学時代のアルバイトから派遣社員という形で就労を果たしており、必ずしも自分の不登校経験について語る必要はない就業の仕方もある。したがって、先に述べたように、就労までに何らかの形で学校や、社会につながっておくことのほうが重要であり、その期間中に、自分はどうのような職業に就きたいのかをよく考え、就職活動中の自分をアピールする場において、もしかしたらついて回ってくるかもしれない不登校経験に対する否定的側面について何らかの形で説明がつくように向かい合っておくのがよいのかもしれない。

⑦ 専門機関について

専門機関については6人中5人が公的機関や病院などに通っていたと回答していた。うち1人はカウンセリングルーム、他の4人は心療内科に通ったとのことだった。高校のカウンセリングルームに行ったAくんは、カウンセリングの先生に会うために学校に行き、辞めることに関しても相談にのってもらったということだった。診療内科に行ったEさんとFくんはバウムテストや箱庭をやったそうであるが、その内容はほとんど覚えていないとのことであった。不登校であるということは、やはり「心の病気」かもしれないということで、精神科や心療内科が選択されていたのであろうが、本人達にとっては「ただ、学校に行きたくない」だけなのにどうして病院なのかということが腑に落ちず、連れて行かれても何のことだかさっぱりわからなかったということだった。インタビューの最中にも筆者にあのときやったテスト（バウムテストや箱庭）はどのような意味だったのかと尋ねる場面もあった。不登校児童生徒を抱えた家庭の中で自分の子どもをどうして良いか分からず、結果として病院に連れて行く以外なかったという両親の気持ちは本人達も現在では理解しているが、やはり彼らが本当に求めていたものは学校に行かないという選択をしたあと、自分の納得できる将来に向けての「情報」であり、一緒にこれからの人生について考

えてくれる人だったのではないだろうか。何人かが述べている通り、彼らが不登校だった10年前の1990年代は周りを見渡しても不登校児童生徒はまだ少なく、中学校を出たら高校・大学に進み就職する以外の道は考えられない時代だった。そんな状況でいわゆる「レール」からはずれ、違う道を選んだ彼らに必要なだったのは「心のケア」ではなく「情報」に他ならなかった。そのことが伝わってくる結果であるように思う。

以上6人のインタビューの中から共通する単語のキーワードとしての「家族」「友達」「教師」「死」「中退後の進路」「就労」「専門機関」7つについて解釈を加えた。7つのうちの最初の4つは不登校を経験しなくても、思春期の多くの子どもが一度は悩む壁であろうが、他の3つはやはり、不登校をすることによって決断しなくてはならなかったり、苦労した点であるように思われる。そして現在の不登校児童生徒と関わっていく中で私たちがもっと耳を傾け、改善していかななくてはならないのもこの点であると思う。

(2) 男女差について

今回の6人中での男女差について、サンプルの少なさや個人の認知構造を考察する目的からすると男女に分けること自体はそれほど意味を持たないかもしれない。しかし、やはり話を聞いている中で感じた差異について性別が無関係ではないかもしれないと感じたことについては次の4つが挙げられる。

① 想起項目の出方について

まず想起項目の出し方について、女性であるBさんとEさんは当時の視線から想起されているということである。Eさん個人の解釈の時も述べたが彼女の場合は想起項目のほとんどが進行形である。Bさんの想起項目は「学校にはやっぱり行きたくなかった」「友達が欲しかった」のように過去形になっているが、その当時の感情がそのまま表れているような文体である。つまり中学生だったBさんEさんの気持ちがストレートに表されている。これに対して男性協力者の場合は、そういった目線のものもあるものの、不登校経験について説明的な項目(Aくん)、当時の感情であっても単語でまとめてしまうという出し方(Cくん)、格言(Dくん)、自分の分析を含む記憶(Fくん)、といったものであり、やはり女性二人とは相当に項目の雰囲気や異なったものとなっている。これは女性ならではの感受性によるものかもしれないが、次にあげる3点について考察していくとまた違った見方もできるように思う。

② 不登校中の焦り・不安について

不登校中の感情として「焦り」や「不安」が現れているのは専ら男性であった。不登校ゆえの家庭での居心地の悪さや、話し相手の少なさなど、窮屈感というのは男女関係なく全員が感じていた感情である。しかし女性はどちらかというところと堂々と不登校をしていたのに対し、男性は旅行に行ったり、本を読んだり、学校に行かない空白の余った時間を、何か意味のあることで埋めようといった、何かを得ようとする姿勢が強く感じられた。

一般的な見方では中学・高校を諦めるということはその後大学進学・就職というレールからの脱落ということになる。不登校児童生徒が外に出かけるのをやめて、家にこもってしまいがちになり、さらには昼夜逆転の生活に陥りがちになるのはよく耳にする話であるが、これは「レールから脱落した者」に対する近所の人々の視線を避けた結果とも考えられよう。大検予備校の中でも基本的には私服であるにもかかわらず、希望に応じて制服の着用を認めているところもあり、これも平日の昼間に私服でいることのうしろめたさや罪悪感をカバーするものであるという。

このような「一般的なレールからの脱落」は、やはり「男だから」困り、男性に対して家族や周りからの圧力がより強くなるのではないだろうか。今回の調査協力者においても、男性のほうが将来の不安をより強く感じており、そこからくる焦りや不安がストレートに現れていたのではないかと考えられる。一方女性は、自分が失うかもしれないキャリアについて深く考えることよりも、むしろ自分の存在についてなどの自己分析や自分を取り巻く世界について深く考えることになり、その差異が現れているのではないかと思う。

③ 不登校後の将来設計について

将来設計についても男性の方が女性よりも多く考えているように見受けられ、男性のほとんどが最終的には「就労」することを前提としていることが特徴であった。彼らに対する「中卒と高卒、大卒では就ける職業が違う」という教師のアドバイスが自分にとって最も実際的なアドバイスであり、そのことを考慮した結果として現在までの道を歩んできたとしている。つまり、彼らにとって「就きたい職業に就けないかもしれない」「選択肢が少なくなる」というのは非常に望ましくないことであり、結果として全員が大学まで進学し、いま、まさに社会人として出発しつつあるのではないだろうか。一方、女性2人も派遣社員と看護学生であり、社会人として十分に自立していける状態であるし、それなりに悩みもしたと思うが、少なくともインタビューの中で進路選択、職業選択の不安が語られることがなかった。この点も今回のインタビューの中で見られた男女の違いである。

④ 不登校による損失について

最後に、この不登校によって何を失ったかということについても性別によって違いが見られた。女性2人にとっては「経験そのものが糧になっている」「辛いことが多いけれども今の自分の一部である」といった認知の仕方であった。一方、男性も同じような受け止め方をしているが、同時に、Aくんはもともとの自分の性格が一因となっているかもしれない、Cくんは今でも引きずっているところがある、DくんとFくんは就職活動の時に大変な思いをした、などといったように不登校による損失や直面させられたことについて言及しており、後悔する面や反省する面など、良い経験だったと言い切れないと語ってくれた。これらのことも、男性の方が不登校によって「つまづいた」と強く感じている可能性を窺わせるものである。しかし同時に、Dくんが述べるところの「開放感」という要素が強いのも男性の特徴である。他にも「自由」という表現が用いられていたり「ほっとした」「すっきりした」というような表現であったりと様々であるが、先のことを考えると暗澹とせざるを得ないものの、自分で下した決定について実行したという自信や、安堵感が表れているのも男性であった。もちろんこの「開放感」は常に感じているものではなく「焦り」や「不安」との葛藤である。しかしこの「開放感」が何にも代えがたいのは事実であり、Dくん曰く「この気持ちを味わい続けながら生きていくために、様々な努力をするのだ」という。このような感想は今回の調査では女性からは出てこなかった。

以上4つの点について性別による違いを挙げてみた。本調査における協力者に関しては男性の方が、中卒では仕事に就けないという現実への直面化やプレッシャー、進学・就職しないわけにはいかないという思いが強かったのが事実であり、そのことから生まれる「この先どうなるのか」「自分の選んだ道は正しかったのか」という不安や焦りに苛まされることも多く、結果として想起項目やインタビューの内容が女性とは雰囲気の違いのものになったのではないかと思われる。しかし最初に述べたように、この男女差は絶対的なものではなく、例えば「女も学歴が重要だ」という家庭で育ったり「男が必ずしも働く必要はない」という周りの環境であればまた、違った結果と成りうる可能性は十分ある。

(3) 不登校経験で得たことについて

これまで個々の不登校の認知構造がどのように構成されているかということを検討してきた、本当にそれぞれがそれぞれの体験をし、悩み苦しんだ様子が窺えた。PAC分析を用いた今回の調査でそれぞれのデンドログラムを作成し、

項目ごとのイメージについて評価してもらった結果、DさんとFさん以外はマイナスの項目の割合が多いという結果になっている。確かに自由連想を促す刺激そのものが「学校に行ってなかったとき」という前提であり、刺激がこれである以上、あまり明るい想起項目は期待できない。一般に、不登校に陥ると、本人も周りの人々も人生にとって取り返しのつかない決定的な出来事であるかのような見方をする傾向があり、将来の夢や希望がすべて消え去ったように感じたり、人生がすべて終わってしまったかのように考え、立ち直りを図ることが極めて困難であるかのように思われている。しかしながら、実際に不登校であった6人の調査協力者たちにおいて今現在、不登校という経験がどのように評価されているかということを見れば、肯定的が3人、どちらでもないが3人と否定的を選んだ人はいなかった。

森田(2003)は、「かつて不登校だったということが現在の自分にマイナスの影響を与えているかどうかはその人が中学時代の不登校を経験した時の気持ちや状態をそのままひきずっているのではなく、卒業してからどのような人生を歩き、どのような経験をしてきたかによって大きく異なる」と述べている。今回の調査結果もこれによく当てはまっていると感じる。6人が6人とも当時の状況はどれも辛いものであった。しかし、誰一人としてそのまま引きこもってしまったり、諦めてしまった人はいなかった。10年かけて進学を続け、仕事を持つに至っている。そうやって進んできた結果、その経験を悪くない、良かったと思っていると評価付けているということであろう。インタビュー後の言葉からも分かるように「辛いことばかりだったけどあの時あれだけ苦しんだことを忘れてはいけないと思う」「私には必要な時期だった」「自分にとっては良い経験だと言えるけど、だからといってお勧めはできない」と、あくまで「苦しんだ」ことを「良い経験」に変えたのは本人自身の努力によることである。今回の調査を経て不登校のその後の判断基準を「再登校」「進学」に置くことは、本当に危険なことであると思った。なぜならCさんやEさんの例にあるように、定時制高校に進学してもイライラ感やムカムカ感が抜けず、逃避の感情に支配されていたり、大学に進学しても自分は向かないと結局休学に至っている。Fさんは大学院まで行きながら就職活動に際してかつての不登校体験を後悔しているからである。本当にかつての不登校体験が本人の人生に影響する可能性があるのは学生時代を超えたところであると思う。もちろん進学・再登校という結果は、社会に所属し続けるという正の連鎖の一段階であり、重要ではあるが、自分の体験が自分にどういう影響を及ぼしたのかと本当の意味で判断できるのは、「就労」に至ったとき、もしくはそれに同等する年齢になってからであるのかもしれない。今回の調査を実施するにあたって設定した20歳代という年齢基

準は先行研究から妥当であると考えた年齢である。予後の判断基準を進学・就労に置かならば、中学・高校を卒業してから10年という月日は、それぞれの人生において方向性が見出せる年齢であり、妥当であるかもしれない。しかしながら、今回の調査協力者の中でも調査者から見て「危うさ」を感じる人が何人かおられたように、あるいは10年後であっても不登校という経験に対する結論は出ていないのかもしれないと思わずにはいられなかった。

(4) 現在の不登校児童生徒に向けて

本研究では6人の方々にご協力を頂いて、それぞれの不登校経験について語ってもらった。それぞれの事例を見れば分かるようにその内容は様々であり、不登校の原因を同じように「人間関係」としていても、その中身は重なるところが少なかった。しかしながら、約10年前に不登校だった彼らのインタビューには確かに共通する言葉があった。本文の中にも何回かは出ているが「今の子はいいなあ」というものである。彼らからすると、現在の不登校児童生徒が「うらやましい」ということである。理由は2つ挙げられ、ひとつは不登校が珍しくなくなったこと、もうひとつは周りの理解と情報が得やすいことであった。確かに不登校児童生徒は10年前からすると増加の一途である。また、不登校児童生徒の受け入れ先として適応指導教室やフリースクールなども増加しており彼らが欲しがっていた「情報」が比較的簡単に手に入るようになっている。これは、当時の彼らにはなかったものであるし、望ましい発展であるようにも思う。

しかし、筆者は今回のインタビューを通じて、この「不登校」の受け入れ先の発展にも疑問を抱かざるを得なかった。村田・三浦(2000)もその論文の中で「今から10数年前と現在の社会状況では不登校とその周辺環境が少しずつ変化している。不登校に対する社会や学校側の受け入れは一見緩やかになり、過去に比べると「学校に行かない」ということへの理解は深まったようにも見える」とし、一方で経済再編に伴う労働市場の変化を挙げ、正採用の求人の減少について述べ、一見不登校に対して学校や社会の理解や受け入れが緩やかになったということと全く逆の厳しい現実の社会の存在について述べていた。しかし、この件に関しては、筆者は否定的には見ていない。なぜなら、厳しい社会の現実是不登校経験者でなくても現代の若者に公平につきつけられた問題であるし、今回のインタビューを通してみる限り、職業に就くか就かないかは本人次第であり、また、必ずしも正社員だけが成功であるとは思えないからである。もちろん今回の調査協力者は多くの不登校の中でも高学歴の部類に入るので特殊である可能性はあるが、逆に言えば学歴さえも本人の努力次第で得ら

れるということでもある。それよりも村田・三浦(2000)が挙げているもうひとつの問題である「不登校となったあとの生活の中で、本人が様々なことに挑戦したり、進路や自分について真剣に悩んだり考えたりという葛藤場面が少なくなっているように思えてならない。自分の情けなさに涙を流したり「自分は変なんじゃないか」と悩んだり考える場面が不足しているような気がしてならない(これは今の世の中全体の傾向かもしれない)」という意見に共感する。確かに社会の「不登校」に対する認識が広まるにつれて、受け入れ先やその対応について、本人たちに最善の方法を提供できるようになっているかもしれない。しかし、それと同時に、本人やその家族が必死に悩むということが少なくなるのではないだろうかと思えてならない。10年前はわが子が不登校になれば、その両親は「もしかしたらどこかが悪いのかも知れない」と数少ない情報の中で、自分たちで必死に答えを探し、精神科や専門機関などを渡り歩くという苦勞をしていたはずである。また本人たちにしても「まわりの友人たちと比べて自分だけが学校に行かない」ということに悩み、苦しんだはずである。結果として家庭内の混乱や衝突が起こるわけだが、そのことが本人たちにとってかけがいのない経験であるとも言え、それを乗り越えたからこそ、今回の6人のように「良い経験だった」と結論付けることができるように思う。しかし村田・三浦(2000)が言うようにそのような葛藤場面が減れば、両親も専門家に任せておけばいい、といったようになってしまったり、ともすれば「学校なんて行かなくてもなんとかなる」と放置してしまう可能性もある。確かに「学校に行かなくてもなんとかなる」という可能性は否めない。しかしあくまで筆者の考えではあるが不登校に悩む子どもたちに対しては「学校に行かなければならない」と必死で説いてくれる大人の存在がやはり必要であると考え。それはやはり、親や教師、支援者に求められることである。同時に「学校に行かない選択もある」と適切なアドバイスをしてくれる大人も必要である。両方の意見を聞き、その結果として本人が選ぶ道はどちらでもかまわないが、親も本人も必死で悩むことが大切である。その過程を抜きにしてしまうと、今現在の不登校児童生徒の10年後は今回のインタビュー結果とは全くかけ離れたものになってしまうかもしれない。学校という場所の意味を考えずに多くのものを失った大人になってしまう危険性を感じずにはいられない。

(5) 本研究の学校心理学的意味

本研究の学校心理学的な意味において、学校心理学とは「学校教育において児童生徒が学習面・発達面・人格面・社会面・進路面において出会う問題を解決し、成長することを促進する心理教育的援助サービスの理論と実践を支える学問体系」(石隈1999)という観点からすれば被調査者は全員成人を迎えており、

学校教育の中での対象からはすでに離れていることになる。しかし今回のインタビューによって不登校をしていた当時の悩みや苦しみ、考えていたことなどがたった6人分ではあるが明らかになった。これは「共通するキーワード」の所で述べたように、現在「不登校」で苦しんでいる児童生徒も多かれ少なかれ、共通する面があると考えられる。したがって何らかの形で現在、「不登校」に関わっている教育者・保護者の子供たちとの関わっていく実践の理論の一助となること、また6人それぞれが語ってくれた「当時の葛藤」や「進路面での壁」など、本人に焦点を当てることによって出てきた赤裸々な感情は、そのまま今の子供たちの気持ちに沿ったものであり、これから直面させられるであろう「課題」を提供することが出来たのではないかと考えている。それだけにとどまらず、本研究をひとつの「情報」として、これから直面する「課題」に対し、子供たちが自らの力で解決し乗り越えていく準備や能力、覚悟などを身に付けていくこと、またこの情報を踏まえた上で、「学校に行こう」と思ってくれる子供が一人でも増えれば、学校心理学の最も重要課題である「予防」につながっていくのではないかと考える。

(6) 今後の課題

今回のインタビューを通して得られたひとつひとつの事例は実に貴重なものであり、調査協力者ひとりひとりの認知構造を目の当たりにできただけでなく、それぞれから現在の不登校児童生徒につながるメッセージが込められており、有益な情報となりえたと思う。これを踏まえて今後の発展のために今回の調査でカバーできなかったことについて以下に挙げていくこととする。

① サンプル数について

本研究の特色のひとつは少数事例におけるインタビューであったことである。このことはひとりひとりに多くの時間を取って検討できるというメリットもあるが、不登校のパターンの多さを考えるとやはり6人では少なすぎるような心残りがあり、今回の考察においても男女差といった内容で検討をしてはいるが、もっと多く的人数でインタビューを取ったときに同じような結果になるかどうかはわからない。この件については後述することになるが、可能であるならばもう少し多く的人数について、男女の違いだけでなく、不登校の時期や状況についてパターン分けして考察を深めることも意味のあることだと考える。

② 調査協力者の現在の状況について

本研究は過去に不登校であった本人自身に過去を振り返ってもらうことに焦

点をあてた。研究の計画を立てるにあたって「過去を振り返る」ことによる危険性を考えて最低限の範囲で現在「日常生活において適応的に過ごしている」と思われる人に自主的に参加してもらった。調査協力者の選定に際しても大検予備校や大学、フリースクールなどを通して推薦してもらったため、協力者が現在健康であることは第三者から見ても保障されていると言えるが、逆にサンプルとしてはかなり限定された人たちでもある。つまり、全員が大検予備校または全日制・定時制高校を卒業しており、ほとんどが大学に進学している人たちばかりである。そういった知能や学歴の面でも優秀だと言える調査協力者に限定されてしまっている。しかし実際に不登校を経験した人たちの中には、中卒・高卒で働いている人もいるし、働かずに家にいる人もいるだろう。そういった人たちにも同じように話を聞くことができればまた違った結果になっていたのではないかと思う。

③不登校の時期・期間について

今回のインタビューにおける調査協力者には各機関の紹介者を通して自ら希望してくれた方々に依頼しているので、「不登校期間」というのは設定していなかった。その為、6人の中には中学校で不登校だった人もいれば高校で不登校だった人もいる。ところが一般に高校生は義務教育段階からは離れたところにあるので「不登校」という言葉は適切ではなかったようである。しかし本研究はあくまで本人の認知を重要視したため、この点に関しても中学で不登校だった人たちと同じように扱った。今回の研究では先に述べたようにサンプル数も少ないので仕方がないとも言えるが、サンプル数を増やすことが可能であるなら、不登校の時期が中学であるのか、高校であるのか、また期間に関しても数ヶ月なのか数年なのかに分けて考察をすることができればより一層意味深いものになったと思われる。

④10年という設定期間について

今回の研究では先行研究より、不登校から10年前後で成人していることという基準で募集を行った。結果として、10年という年月は自分の不登校経験のある程度消化した上で日常生活を送っているという点では妥当であったが、やはりまだ、職に就くようになって間もないせいか不安定さや、迷いも感じられた。当然、不登校経験から15年後や20年後といった協力者がいればまた違った側面で、その後について検討することが可能であったと思われる。同時に今回インタビューに協力してくれた人たちの、15年後20年後にまた話を聞くことができればと強く思う。

【文献】

青木繁伸 2005 Black-Box

<http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/bb0/blackbox0.cgi>

石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房

大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 —現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 100-109.

大野久・茂垣まどか・三好昭子・内島香絵 2004 MIMIモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究, 52, 320-330.

桑代智子・郷間英世・森下一 2002 不登校を経験した成人の対人関係についてバウムテストによる検討 教育心理学研究, 50, 345-354.

内藤哲夫 2002 PAC分析実施法入門【改訂版】 ナカニシヤ出版

西平直喜 1973 青年心理学 共立出版

福間悦夫 1980 登校拒否症の長期予後 精神医学 22(4), 401-408.

松浦宏・新井邦二郎・市川伸一 2004 学校心理士と学校心理学 北大路書房

松崎学 2002 個に接近する新技法を適用する 大野木裕明・中澤潤(編著) 心理学マニュアル研究法レッスン 北大路書房 126-132.

村田昌俊・三浦務 2000 不登校学級卒業生のその後 情緒障害教育研究紀要, 19, -.

森田洋司 2003 不登校—その後 教育開発研究所

渡辺位 1983 登校拒否の予後 臨床精神医学 12(7) : 851-856

渡辺位 1992 不登校のころ 教育史料出版会

渡辺淳一 1998 不登校の予後研究 オープンシステムの親の会における調査を通して 兵庫教育大学大学院学位論文

おわりに

社会人として忙しい毎日の中、私の修士論文執筆の為に時間を割いていただき、しかも「自分の過去の体験を振り返り、他者に語る」という大変な作業を、快く引き受けていただいた協力者の皆様に心より感謝いたします。

また、本研究を進めるにあたって私の拙い説明に共感していただき今回の調査の協力者を紹介していただいた上に、施設まで提供していただいた神戸の大検予備校の校長先生、近畿大学の堀田泉教授、奈良県のフリースクールのスタッフの方々に厚く御礼申し上げます。

兵庫教育大学大学に入学してから2年間、あたたかいご指導、ご助言をいただきました先生方に感謝の気持ちをこめ、重ねて御礼申し上げます。

最後に、この2年間いつもぼんやりしている私をお母さんのように、お姉さんのように助けてくれた学校心理コースの皆様感謝いたします。

本当にこの論文は自分ひとりで仕上げたのではなく、皆様のご協力と愛情によって仕上げることができたのだと思わずにはられません。

そして何よりも今回の協力者の皆様にして返せることは、ここで終わりにすることなく、ここを出発点にして更なる研究に努めることだと肝に銘じております。本当にありがとうございました。

2006年 1月10日

堀田 夏子